

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(32)

野 原 遺 跡 群

早 風 A 地 点

1979.3

岡 山 県 教 育 委 員 会

文 化 課

序

岡山県は、南は瀬戸内海に面し、北に中国山地をひかえる起伏に富んだ地形をしております。そして、気候的にも恵まれた自然環境のなかで先史時代から多くの人々の生活の場となってきました。このため量、質とも全国屈指の文化財に恵まれた地域といわれています。その保護保存につきましては県政上においても特に慎重に対処しております。

文化財のうちでも、旧石器時代の遺跡は地下深く埋蔵されていることが多く、遺跡の発見が難しいことから、その保護保存は最も困難なことの一つであります。

このたび国庫補助を受けて調査を実施しました野原遺跡群早風A地点は、中国山地にある旧石器時代の遺跡として、全国的に注目されていたものであります。この発掘調査の結果、礫群、炭化物集中部などの遺構とともに、局部磨製石斧などの石器がローム層の中から出土した。この石器群は、瀬戸内海沿岸で発見されるものとは異なった特色を示しており、これによって山間部独自の文化圏が想定されます。

こうした調査の成果をふまえて、ここに発掘調査報告がまとまりました。この報告書が文化財の保護保存のために活用され、またこの地域の歴史を解明し、あるいは旧石器時代研究のための資料として役立てば幸いです。

最後になりましたが、調査にあたって指導助言をいただいた専門委員をはじめとする研究者各位、多大な支援をいただいた神郷町役場、神郷町教育委員会、地権者等関係各位、さらに調査作業に従事していただいた地元の方々には厚くお礼申し上げます。

昭和54年3月

岡山県教育委員会

教育長 佐藤章一

例 言

1. 本書は、岡山県教育委員会が 国庫補助を受けて実施した「野原遺跡群早風A地点緊急発掘調査」の報告である。
2. 遺跡は阿哲郡神郷町高瀬野原に所在する。
3. 発掘調査は平井 勝が担当し、専門委員の指導助言を受け、1978年7月21日から12月20日まで実施した。

また発掘調査と並行して鳥取大学 赤木三郎教授等による地質調査も行なわれた。

4. 発掘調査にあたっては神郷町教育委員会ならびに地権者 小谷浅一氏、小谷勝康氏から諸々の面で援助を受けた。また発掘作業は下記の方々の協力を得て行なわれた。記して感謝の意を表したい。
井田武男、坂本 茂、白根節保、難波登喜男、男知合音一、内田照昭、白根照代、上田江美子、小谷純子、中田繁子、後藤栄美子、松原久恵、四木敏子、下坂恵枝、後藤しずか、槇原常子、小川島子、木下絹子、小谷良子、福原桂子、千原康代、喜美田つた子、竹縄みつ子、島田美里。
5. 遺物整理は、一部発掘調査と並行して行なったが、大部分は発掘調査終了後文化課分室において下記の方々の協力を得て行なった。

行田裕美、松井正信、平井三恵、三好正二郎（広島大学）、高田明人（広島大学）。

なお遺物写真については井上 弘氏の協力を得た。厚く御礼申し上げます。

6. 本報告書の執筆・編集は平井が担当し、付載は赤木三郎氏（鳥取大学教授）より玉稿をいただいた。

なお1976年度の調査については、1977年3月に刊行された「野原遺跡（早風A地点）発掘調査報告書」に概要を報告済みであるが、今回その資料もあわせて検討を加えており、本書をもって本報告としたい。

7. 発掘調査及び遺物整理、報告書作成にあたっては専門委員をはじめ、下記の方々から御指導、御助言を賜った。記して厚く御礼申し上げる次第である。

安川豊史、高橋 護、山口讓治、金山喜昭。

目 次

第Ⅰ章 調査の経緯	1
第Ⅱ章 遺 跡	2
第一節 遺跡の位置と周辺の遺跡	2
第二節 調査の方法と経過	4
1. 調査の方法	4
2. 調査の経過	6
第三節 層 位	7
第Ⅲ章 遺構と遺物	8
第一節 先土器時代	8
1. 石器・剥片類の分布	8
2. ユニットの石器	20
3. 礫群と炭化物	37
第二節 縄文時代	44
第Ⅳ章 早風A地点出土の石器群	48
第Ⅴ章 結 語	49
付 載 野原高原の地形と地質	51

図 目 次

第1図 野原高原の遺跡分布図（先土器～縄文時代の遺跡）	3
第2図 発 掘 深 度	4
第3図 早風A地点の地形とグリッド設定図	5
第4図 早風A地点縦横断面図	折込
第5図 土 層 柱 状 図	7
第6図 先土器時代ユニット・礫群概念図	8
第7図 先土器時代遺物分布全体図	折込
第8図 石 材 別 分 布 図	9
第9図 ユニットAの石材分布と接合関係図	10
第10図 ユニットAの器種分布図	11
第11図 ユニットB・Cの石材分布と接合関係図	12
第12図 ユニットB・Cの器種分布図	13
第13図 ユニットDの石材分布と接合関係図	14
第14図 ユニットDの器種分布図	15
第15図 ユニットE・Fの石材分布と接合関係図	16
第16図 ユニットE・Fの器種分布図	17
第17図 ユニットGの石材分布と接合関係図	18
第18図 ユニットGの器種分布図	19
第19図 ユニットAの石器1	21

第20図	ユニットAの石器 2	22
第21図	ユニットAの石器 3	23
第22図	ユニットAの石器 4	24
第23図	ユニットBの石器	24
第24図	ユニットCの石器	25
第25図	ユニットDの石器 1	26
第26図	ユニットDの石器 2	27
第27図	ユニットDの石器 3	28
第28図	ユニットEの石器	29
第29図	ユニットE・Fの石斧 1	30
第30図	ユニットE・Fの石斧 2	31
第31図	各ユニット出土のハンマーストーン・投弾	32
第32図	単独出土の石器	33
第33図	ナイフ形石器の接合資料	34
第34図	接合資料	35
第35図	礫・炭化物分布全体図	37
第36図	礫群Ⅰの接合及び実測図	38
第37図	礫群Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅴの接合及び実測図	39
第38図	礫群Ⅵの接合及び実測図（左）と礫群Ⅰ下層の礫接合図（右）	40
第39図	土壌1と出土遺物	44
第40図	縄文時代の遺構全体図	45
第41図	土壌2と出土遺物	46
第42図	土 壌 3	46
第43図	土壌4と出土遺物	47
第44図	土壌5と出土遺物	47
第45図	土 壌 6	47
第46図	土 壌 7	47
第47図	早風A地点出土石器群編年図	折込

図 版 目 次

図版 1	1 遺跡遠景（北より） 2 遺跡遠景（西より）
図版 2	層 位
図版 3	作業風景
図版 4	石器・剥片類の出土状態
図版 5	礫群出土状態
図版 6	1 縄文時代の土壌 2 調査終了時の全景（東北より）
図版 7	1 ユニットAの石器 2 ユニットBの石器
図版 8	1 ユニットCの石器 2 ユニットDの石器
図版 9	1 ユニットE・Fの石斧 2 単独出土の石器 3 投弾・ハンマーストーン
図版10	接合資料

第 I 章 調査の経緯

野原高原は岡山県の北西部、中国山地の最奥部に位置する。この高原には数多くの遺跡が存在するが、とりわけ先土器時代から縄文時代にいたる遺跡が集中的に認められ、かつ保存状態が良好なことから、研究者も注目していた。

ところが1976年に早風A地点の地権者が圃場整備を計画し、また遺跡の東側から土取りが行なわれたことから、岡山県教育委員会と神郷町教育委員会は同年に一部発掘調査を実施した。その結果、瀬戸内の地域とは様相の異なる石器群が出土し、また層的にも、平面的にも良好な状態を保っていることが確認された。岡山県教育委員会はこの調査結果から、重要な遺跡であるとの認識のもとに、神郷町教育委員会ならびに地権者と保存協議を行なってきた。しかし地権者の強い要望と、土取り場跡からの自然崩壊が著しく進行してゆくことから、国庫補助を受けて全面発掘調査を実施することになった。発掘調査にあたっては専門委員を委嘱し、専門分野から指導・助言を得た。

専門委員

赤木三郎（鳥取大学教授）

小野 昭（岡山大学助手）

鎌木義昌（岡山理科大学教授・岡山県文化財保護審議委員）

近藤義郎（岡山大学教授・岡山県文化財保護審議委員）

小林博昭（岡山理科大学講師）

春成秀爾（岡山大学講師）

間壁忠彦（倉敷考古館館長）

水内昌康（岡山女子高等看護学院教頭・岡山県文化財保護審議委員）

調査員

平井 勝（岡山県教育庁文化課 文化財保護主事）

発掘調査参加者

行田裕美、松井正信、平井三恵、坂入民子（明治大学大学院）、松下道恵（明治大学）、内田建一、大平 登、三好正二郎（広島大学）、高田明人（広島大学）、前田昌彦

調査期間中、諸科学の分野から絶大なる御協力をいただいた。記して感謝の意を表したい。

地質 赤木三郎（鳥取大学教授）、滝田澄正（大佐中学校教諭）

石材鑑定 三宅 寛（岡山理科大学教授）

花粉分析 三好教夫（岡山理科大学教授）

熱ルミネッセンス 市川米太（奈良教育大学教授）

サヌカイト原産地同定 東村武信（京都大学教授）

第Ⅱ章 遺 跡

第一節 遺跡の位置と周辺の遺跡

A. 遺跡の位置と現状

野原高原は岡山県の北西部、中国山地深奥部の鳥取県境に接して位置する。高原は県境から南北約1.3km、東西約2kmにわたり、南に向かってゆるやかに広がる。早風A地点はその北東部の野原スキー場南側丘陵上に所在し、標高530m前後を測る。

早風A地点の所在する丘陵は、東西両側を谷によって浸蝕され、東側では特に急峻になっている。丘陵上は苗畑となっており、頂部では削平が著しい。東側は土取りと苗畑の造成で切り取られているが、南側はゆるやかな斜面となっている。

B. 周辺の遺跡

野原高原上には多くの遺跡が認められるが、とりわけ先土器時代から縄文時代にいたる遺跡は集中的に所在する。特に鳥取県上石見から岡山県高瀬へ至る道路の両側には多い。この道の東側の丘陵は北から南へのびているが、その北端に早風A地点が位置し、これより南へB～Fの各地点が所在する。これらの多くは安東 信氏の発見によるもので、縄文時代早期から前期にかけての遺物が狭い範囲に分布している。これらの遺跡の概要については安東 信氏の報文(註1)、あるいは前回の報告書(註2)に記載されている。この中で先土器時代の遺物が出土するのはB地点と、D地点の南端にある墓地である。

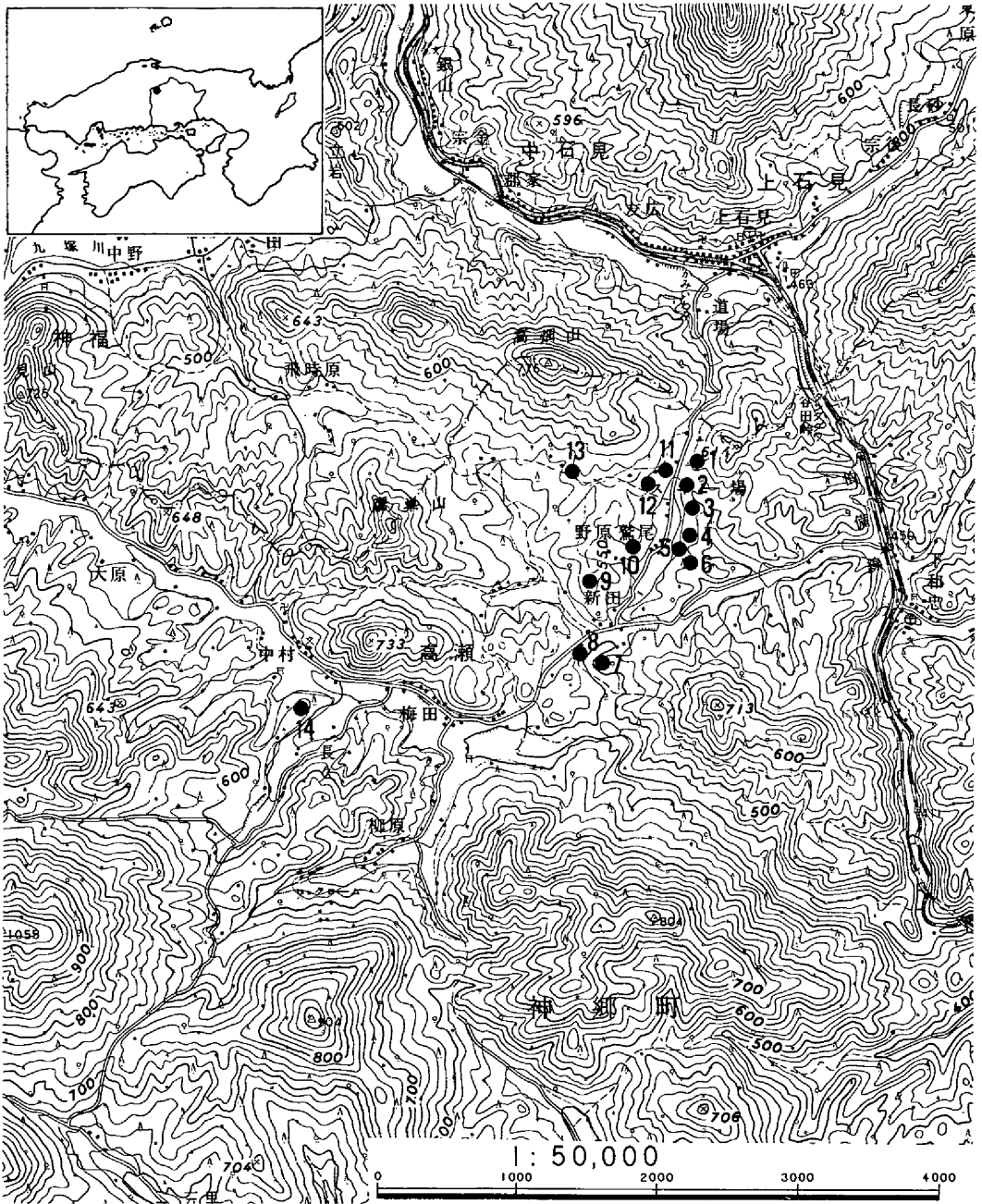
B地点ではこれまで縄文時代早期の押型文土器や石鏃が採集されていたが、今回表採を行ったところ、マイクロブレイドや、楔形石器、小石刃を剝離する石核など、先土器時代の遺物と考えられるものが認められた。またD地点の南側にある墓地では、墓を造る際に掘りかえした黄褐色土中より黒曜石の剝片が出土している。早風A地点の層位で言えばⅢ層にあたり、先土器時代のものにまらがないと考えられる。

これら早風各地点の位置する丘陵の西側は広い谷となっているが、その谷の西側の丘陵上にも縄文時代早期、あるいは前期の遺跡が点在している。この丘陵上ではまだ確実に先土器時代と考えられる遺物の発見はないが、今後発見される可能性は高い。

註

註1 安東 信「野原高原採集の縄文遺物」『倉敷考古館研究集報』第8号 1973年

註2 竹田 勝「野原遺跡(早風A地点)発掘調査報告」『岡山県埋蔵文化財報告』7 1977年



- | | | | | |
|-----------|------------|------------|-------------|-----------|
| 1. 早風A 地点 | 2. 早風F 地点 | 3. 早風B 地点 | 4. 早風C 地点 | 5. 早風D 地点 |
| 6. 早風E 地点 | 7. ゴルフ場内遺跡 | 8. 新田遺跡 | 9. ナベブタノ口遺跡 | |
| 10. 堤の上遺跡 | 11. 野原G 地点 | 12. 野原H 地点 | 13. 藤ヶ迫遺跡 | 14. 大原遺跡 |

第1図 野原高原の遺跡分布図（先土器～縄文時代の遺跡）

第二節 調査の方法と経過

1 調査の方法

発掘調査はグリッドを設定して行なった。設定に際しては1976年度に設定した10mのグリッドに合わせた。グリッドの名称はX軸のアルファベットを先に標示し、Y軸の数字を付けた。例えばC5グリッド、D4グリッドとなる。

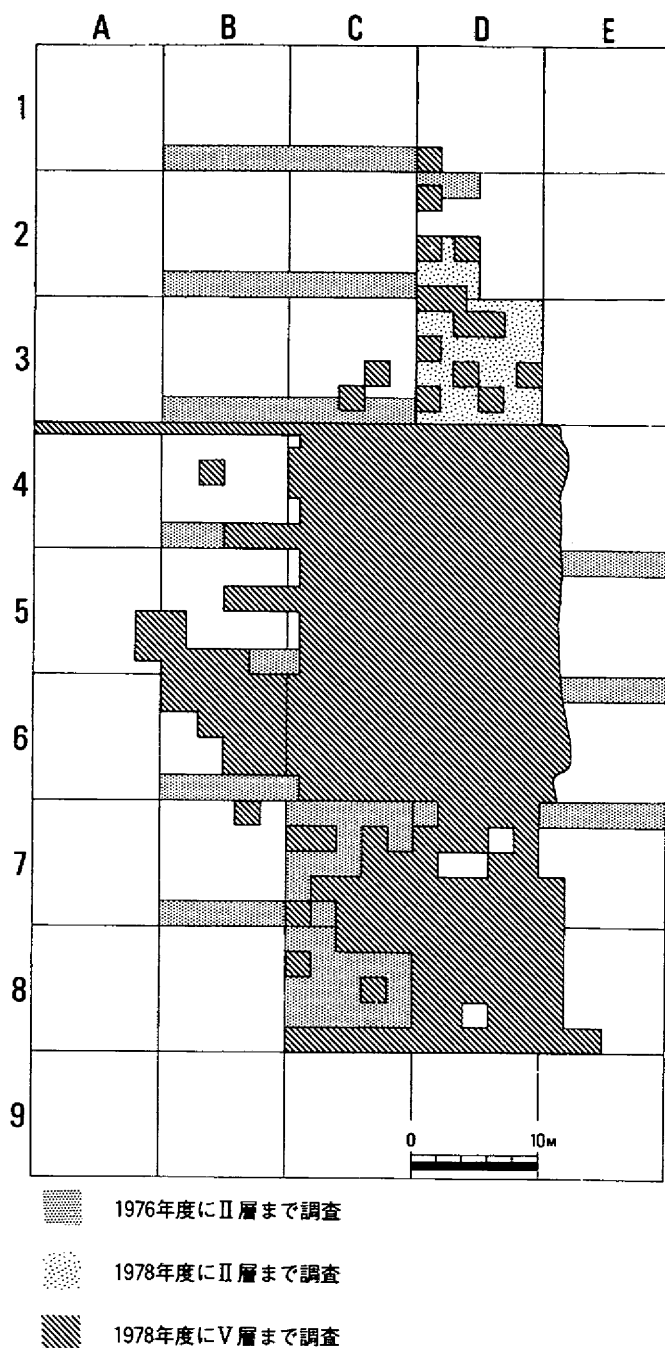
発掘は各層ごとに掘り下げ、Ⅲ層以下の石器・剥片類にはグリッド毎に1から番号を付し、レベルを計測した。また出土位置は平板を用いて、1/40でドット化した。

土層断面はC列とD列の境を南北に、3列と4列の境を東西に、ほぼ丘陵を縦横断するように設定した。図化は1/20で行なった。

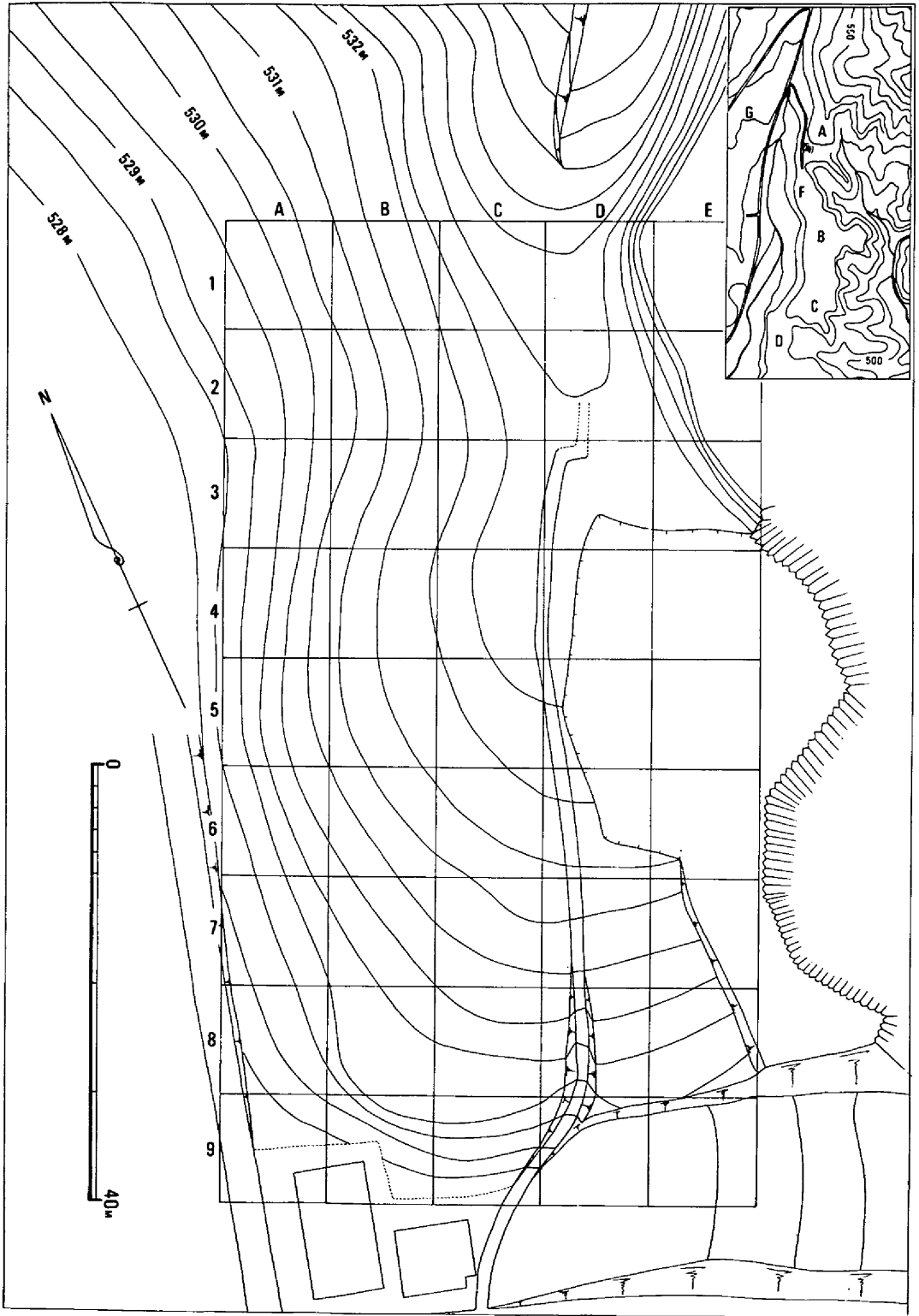
礫群の礫は群ごとに1から番号を付し、方位を記入し、レベルの計測を行なった。実測は1/20で行なった。

炭化物はC4～C6、D4～D6で検出作業を行ない、1/40でドット化した。その他のグリッドでは気象条件が悪く、検出作業ができなかった。

C4～C6、D4～D6以外のグリッドについては、2×2mの小区画を設定して掘り下げた。そして遺物が出土した場合は周辺を拡張するという方法をとった。



第2図 発掘深度



第3図 早風A地点の地形とグリッド設定図

2 調査の経過

発掘は10mのグリッドを設定し、C4～C6、D4～D6 グリッドから全面調査を開始した。土層断面は丘陵を縦横断するようにC、Dラインの境と、3、4ラインの境に設定した。また必要に応じ、各場所に深掘のトレンチを設定し、層位を確認しつつ調査を進行させた。これらのグリッドについては表土を除去したのちに、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ層と分層発掘を行ない、各層での地形測量を行なった。また炭化物の検出を行ないドット化した。これらのグリッドを完了したのは10月の終りであった。

その他のグリッドについては、2×2mの小グリッドを設定し、遺物が出土した地点を拡張していく方法をとった。これらのグリッドについては11月になったため凍結・溶解という気象条件となり、炭化物の検出はできなかった。

調査終了近くになって多くの遺物が出土したため作業員を増員し、できるかぎり広く掘り進めた。このため2×2mの小グリッドは掘り下げ後すぐ隣接地を掘り、終了した小グリッドに土を埋めていく方法をとった。こうして急ピッチで発掘を行ない、ほぼ全体をとらえることができ、大雪となる直前に調査を終了した。

日誌抄

1978年7月24日 発掘調査開始。1976年度調査に合せて10mのグリッドを設定した。

7月25日～8月4日 C4、C5、C6、D6、D4、D5の順序で表土を取り去った。

8月7日～27日 Ⅲ層の調査を行なう。Ⅲ層は厚さ約30cm前後あり、2回にわけて掘り下げた。C4、C5、C6、D6の順序で掘り下げ、C5ではⅣ層との境で礫群を検出した。C6、D6で水晶の石器・剝片類が出土。

8月28日～9月24日 Ⅳ層の調査を行なう。C4、D6、D5、D4、C5、C6の順序で掘り下げた。炭化物の検出などを行なう。

9月25日～27日 E4のⅣ・Ⅴ層掘り下げ。この場所は丘陵で一番高い所にあたり、上部はかなり削平されていた。このためⅢ層はほとんど残存せず、Ⅳ層も非常に薄い。したがってこの部分の遺物は一部Ⅳ層に入るものもあるが、大多数はⅤ層に属するものである。

9月28日～11月6日 Ⅴ層の調査を行なう。D4、C6、C5、D6、D5の順序で掘り下げた。またE5、E6の調査も行なう。

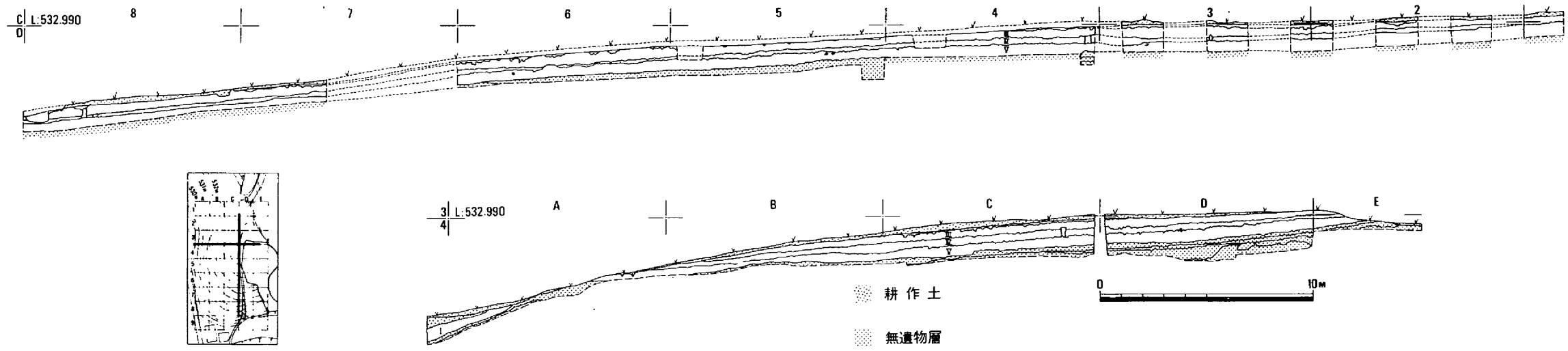
11月7日～16日 C7、C8、D7、D8は2×2mの小グリッドを設定し、各所を掘り下げた。そしてユニットにあたった部分を拡張していった。

11月17日～26日 D1、D2、D3についても2×2mのグリッドを設定して掘り下げた。先土器時代の遺物は少なかったが、縄文時代の土壙2基を確認した。

11月27日～12月19日 B6、A6の調査を行なう。流紋岩製の石器が多数出土した。

またC7では局部磨製の石斧が出土するなど、調査期間がさし迫ってから多くの遺物が出土した。それに加え、凍結と雪で悩まされる毎日であった。

12月20日 補足調査を行ない、発掘調査を終了する。



第4図 早風A地点縦横断面図

第三節 層 位

早風A地点の基本的な層位は柱状図に示す通りである。丘陵上ではⅢ層からⅤ層までは安定し、ほぼ全面に堆積しているのに対し、Ⅵ層以下は場所によって堆積の状態が異なる。これら各層についての地質学的分析、あるいは周辺地域の火山灰層との比較については、付載で詳細な検討がなされており、ここでは各層の肉眼観察による特徴と、その広がりについての所見をのべておく。

第Ⅰ層 黒色土層。この地域で黒ボクと言われているものである。丘陵上では耕作によって攪乱されているため純粋な第Ⅰ層は存在しないが、西側の谷部には純粋なものが厚く堆積している。縄文時代の遺物はこの層に含まれるが、耕作により細片化し、原位置を保つものはない。

第Ⅱ層 暗茶褐色土層。漸移層である。この層も耕作によって攪乱されており、丘陵上ではほとんど残存していない。

残存状態が良くないため、遺物については明らかでないが、縄文時代早期、あるいは先土器時代の遺物もこの中に含まれる可能性がある。

第Ⅲ層 黄褐色土層（ソフトローム）。軟質の火山灰層で、白色のパミス粒を多く含む。丘陵全面にほぼ均等に堆積しているが、西側の谷部ではⅠ層に切られてなくなる。Ⅲ層も上部は耕作によって一部攪乱されている。先土器時代の遺物を含む。

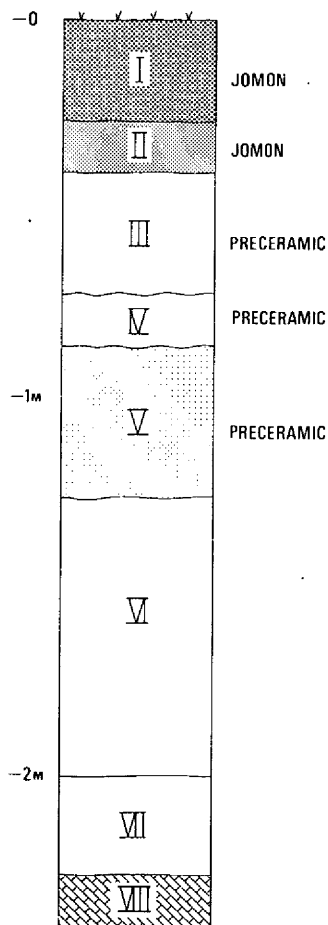
第Ⅳ層 淡黄褐色土層。Ⅲ層に比較してやや粘質になる。丘陵全面にほぼ認められるが、D4グリッドの東側では薄くなる。Ⅲ層との境界は波状になる。

この層は前回の調査においてⅣa層としたものであるが、今回の調査で明確に分離できたのでⅣ層とした。先土器時代の遺物を含む。

第Ⅴ層 暗褐色土層。粘質で有機物を含むと考えられる。丘陵全体に厚く堆積しているが、場所によっては上下で多少色調が異なることから、分離できる可能性がある。この層は前回の調査でⅣb層としたものである。先土器時代の遺物を含む。

第Ⅵ層 赤褐色土層。硬質で石粒を多く含む。中央部では厚く堆積しているが、西側や南部ではほとんど認められず、Ⅴ層の下はすぐクサレ礫層になる。無遺物である。

第Ⅶ層 クサレ礫層。基盤層であるが、中央部ではⅥ層との間に白色粘土層（Ⅶ層）が認められる。



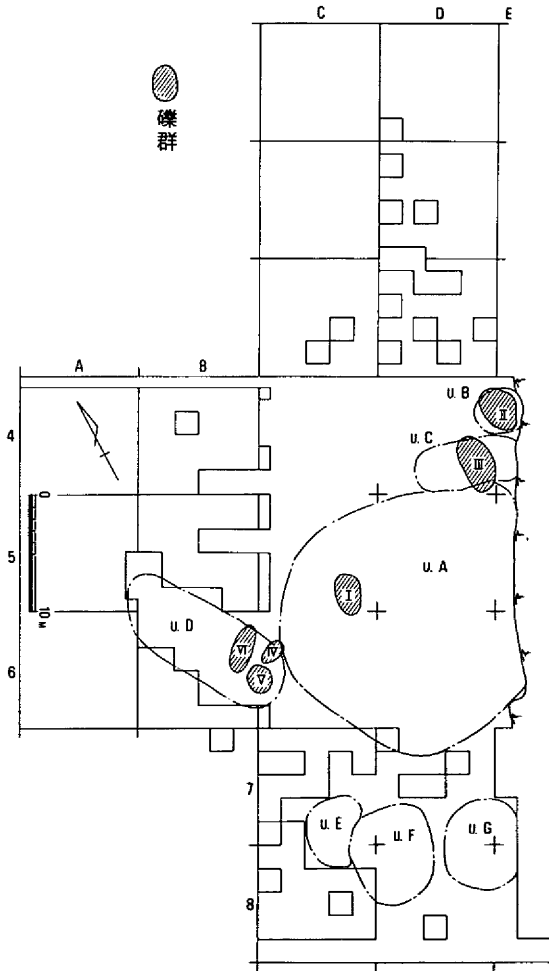
第5図 土層柱状図

第Ⅲ章 遺構と遺物

第一節 先土器時代

1. 石器・剥片類の分布

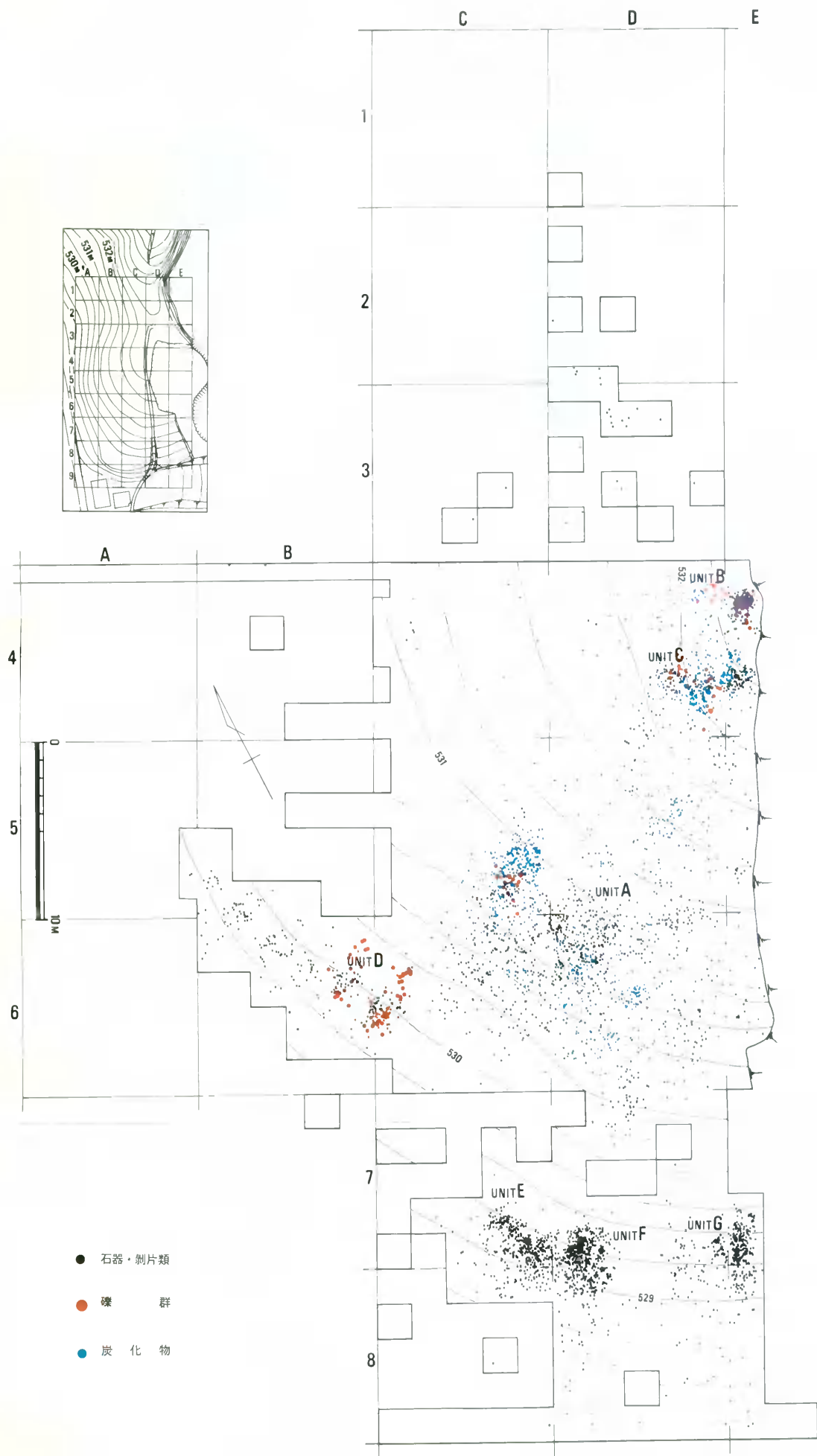
先土器時代の遺物はⅢ・Ⅳ・Ⅴ層より出土する。遺物には石器・剥片類、礫および炭化物があり、これらは一定のまとまりをもって出土しており、概念図のようにまとめることができる。



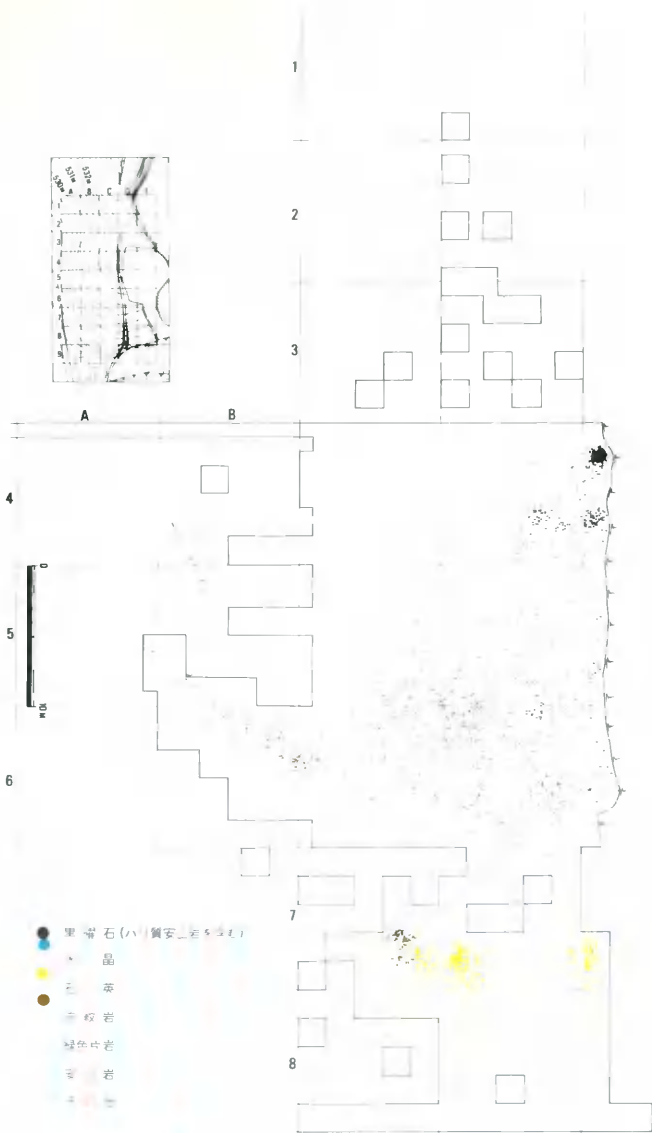
第6図 先土器時代ユニット・礫群概念図

早風A地点での石器・剥片類の集中部(ユニット)は7箇所認められた。このユニットは層位別に設定したものではなく、Ⅲ層からⅤ層までの総てを投影し、その集中部をまとめたものである。これは層位別のユニットがすべて重なり、またⅢ層とⅤ層の間に接合関係が認められたことから、同一ユニットと判断できたことによるものである。かと言って各層均等に含まれるというわけではなく、石材によって、あるいはユニットによってⅢ・Ⅳ層に中心があるもの(Aユニット)とⅤ層に集中的に含まれる(B~Gユニット)ものが認められる。したがってここでのユニット設定の目安は、平面的に集中していることが第一であるが、近接しているユニットは石材の違いで分離設定した。

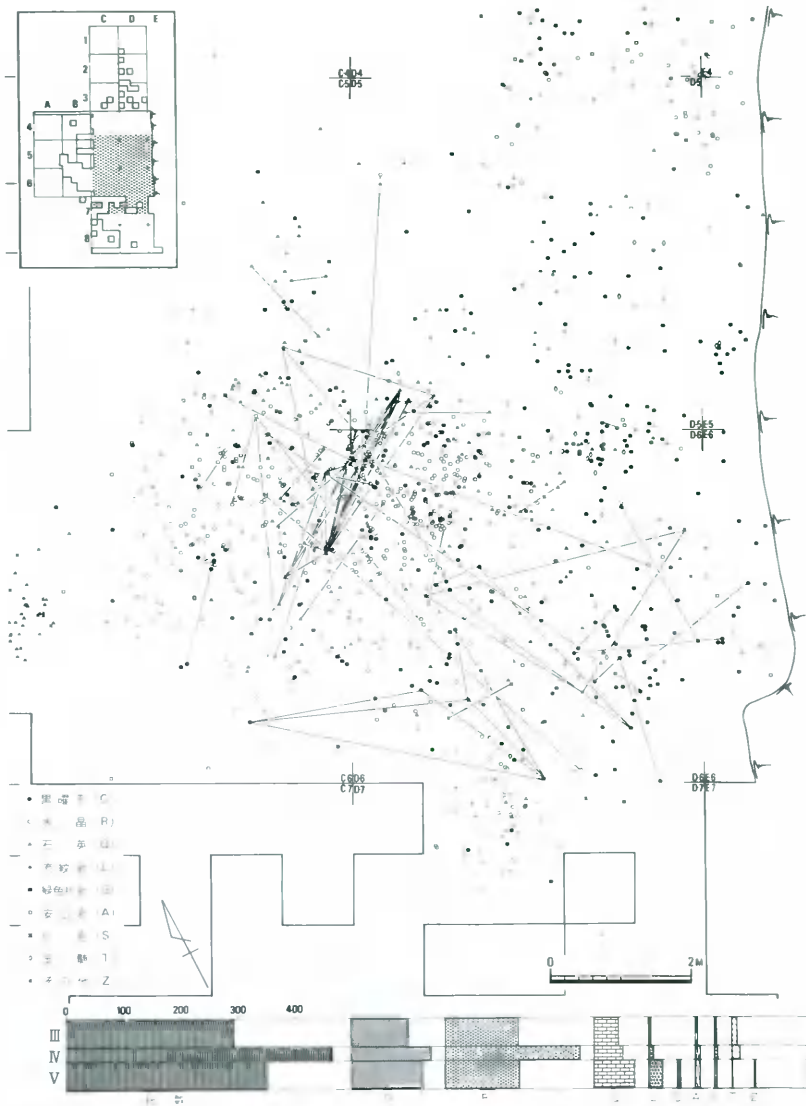
これらユニット内の接合関係、あるいは器種別分布は図に示すとおりである。なお垂直分布については斜面のため、レベル通りに投影すると本来の層の中へ入らなくなるため、調査の時に層位別に取り上げた点数を石材別に示している。



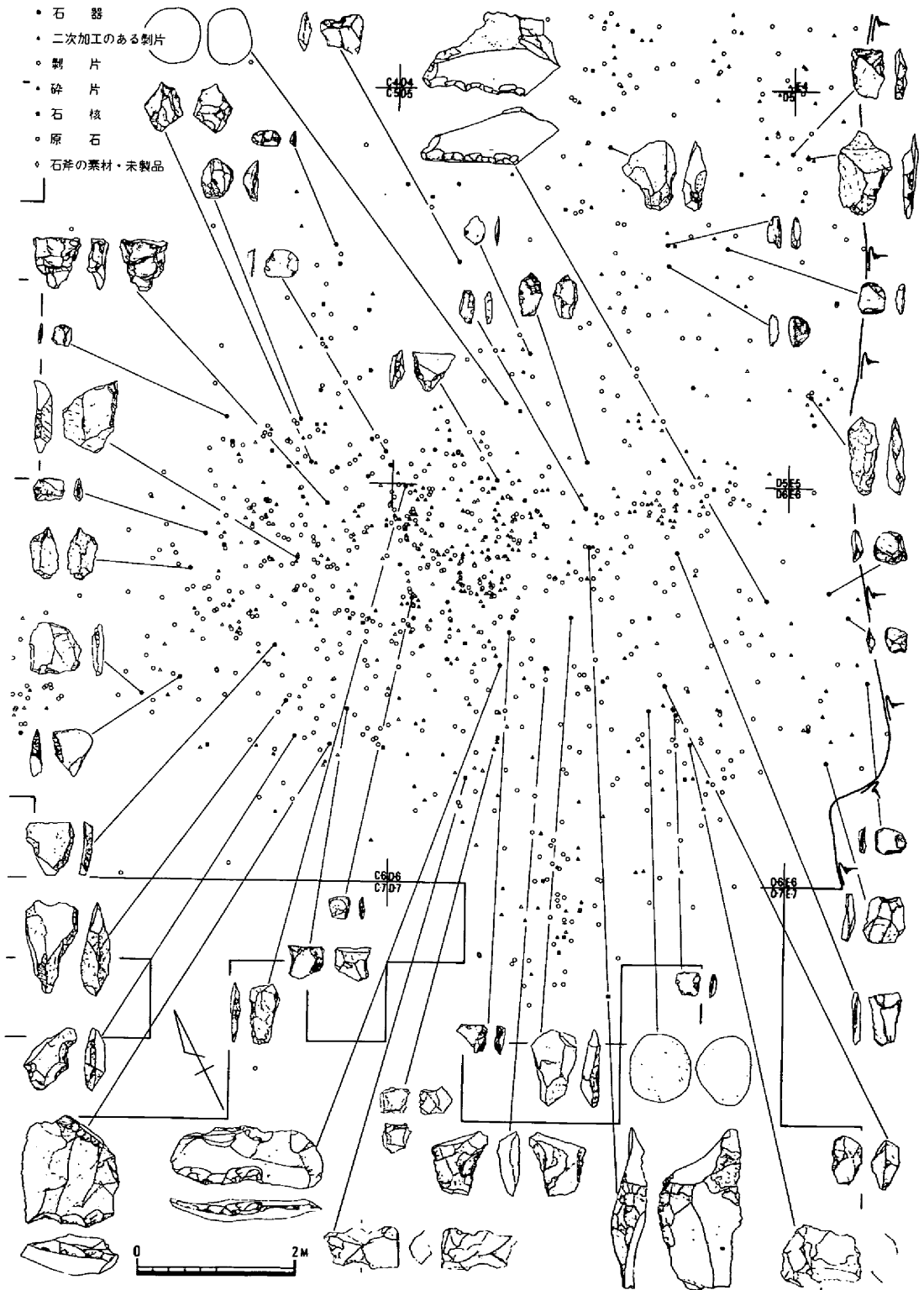
第7図 先土器時代遺物分布全体図



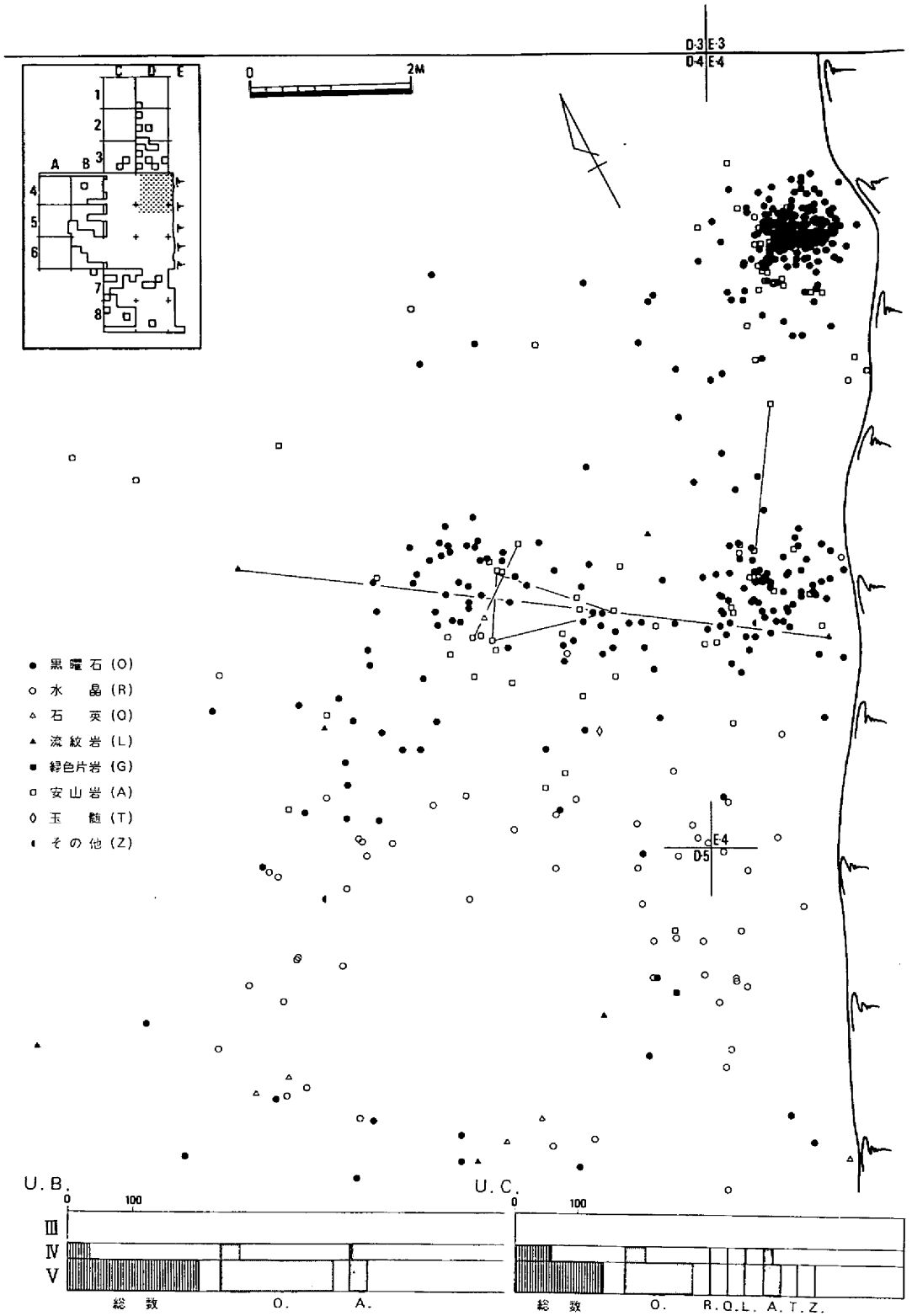
第8図 石材別分布図



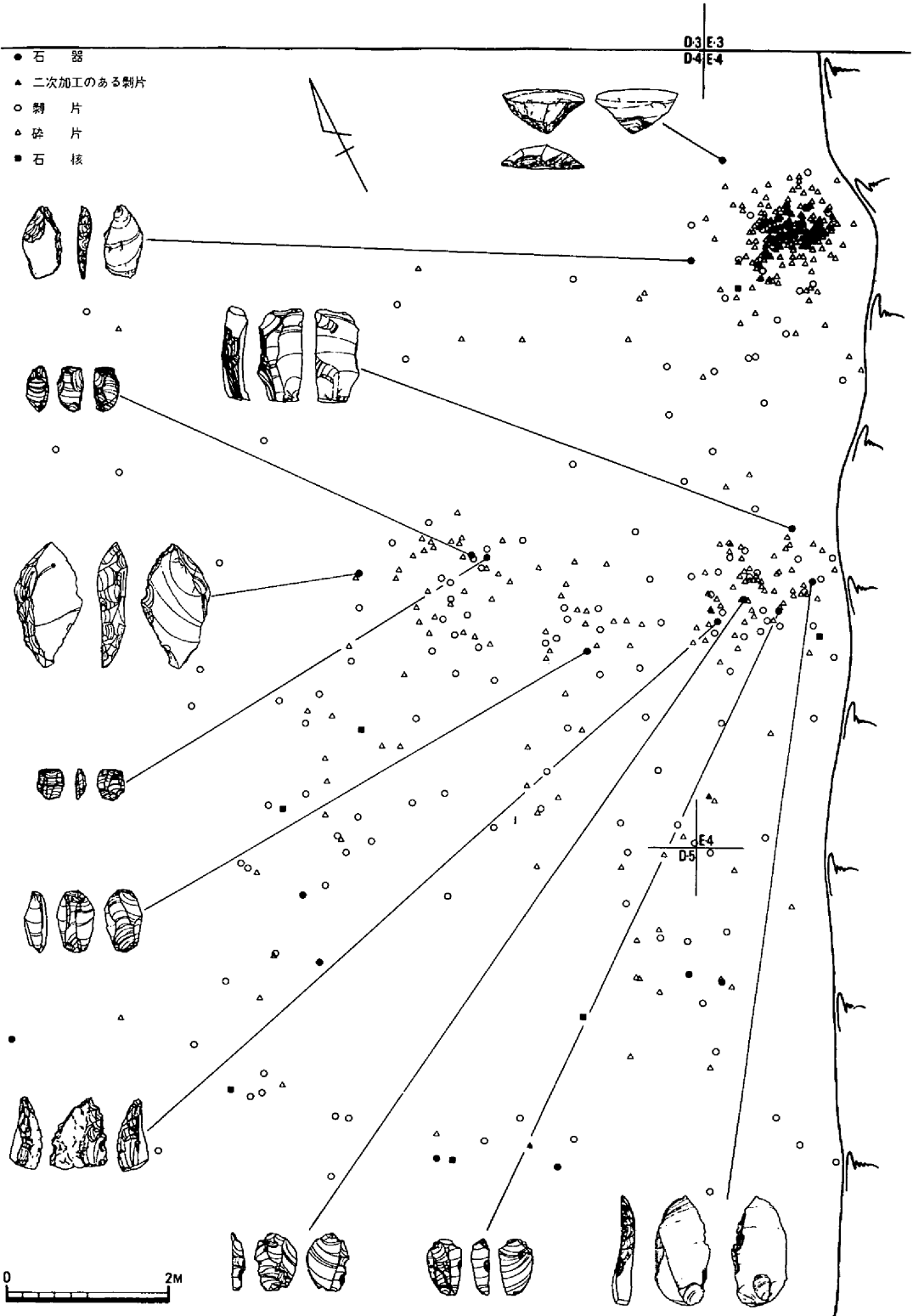
第9図 ユニットAの石材分布と接合関係図



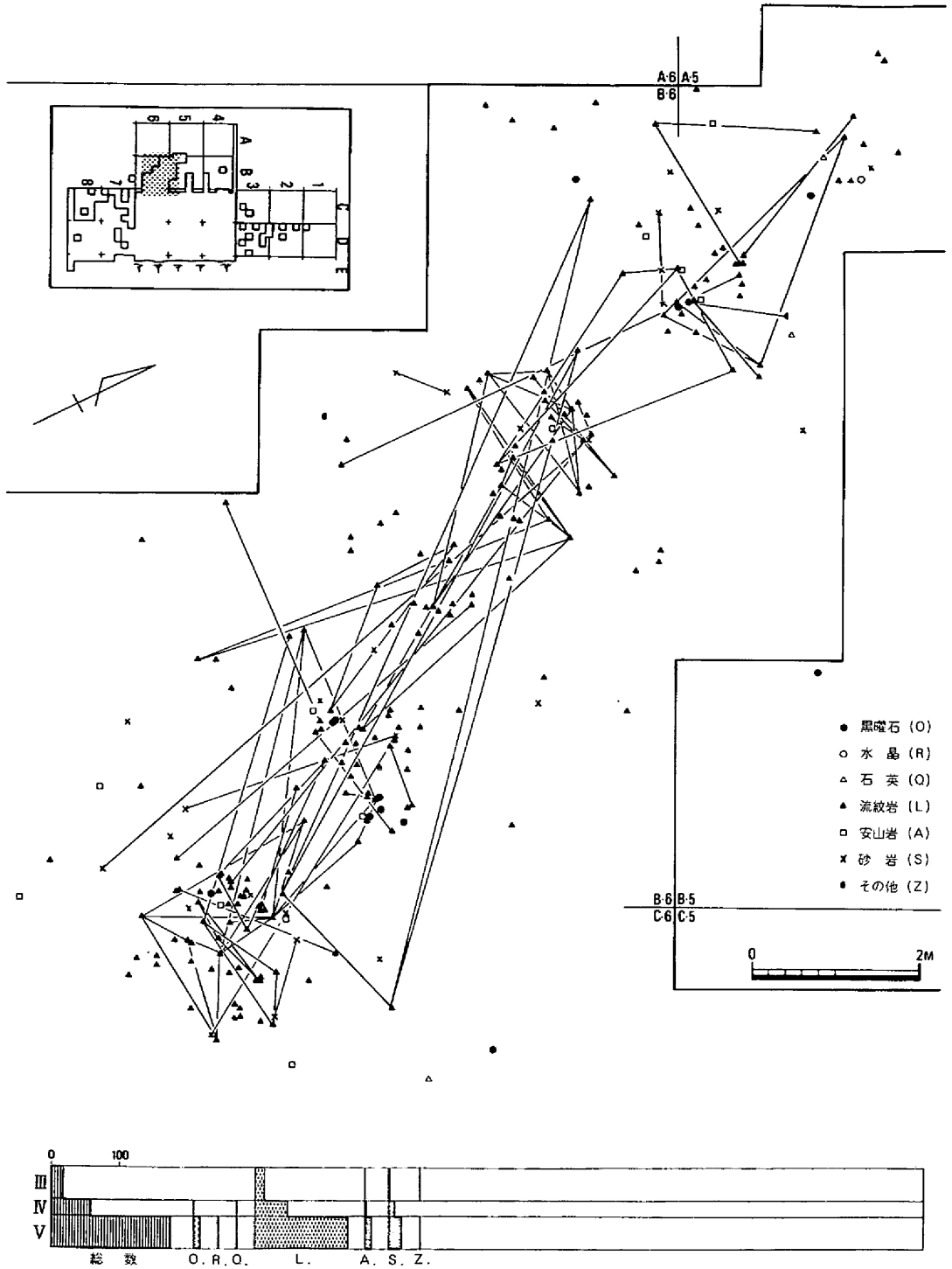
第10図 ユニットAの器種分布図



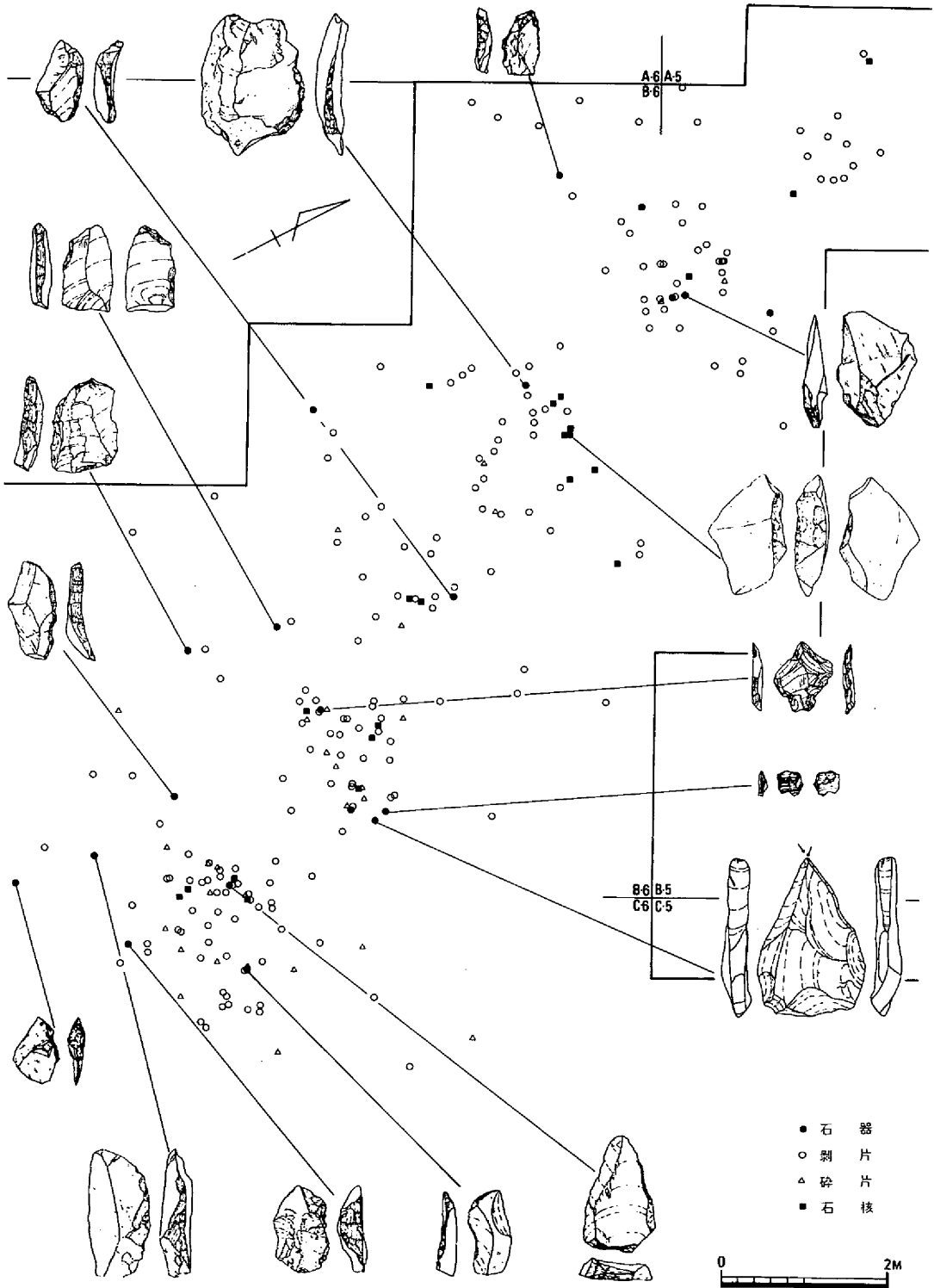
第11図 ユニットB・Cの石材分布と接合関係図



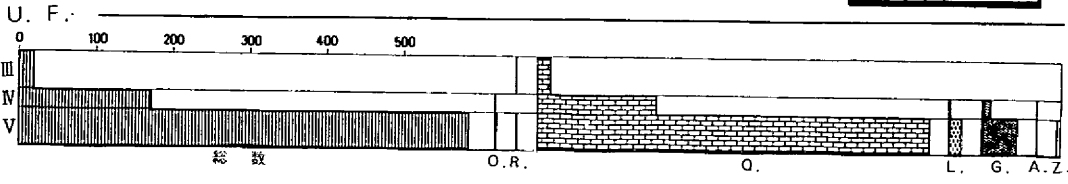
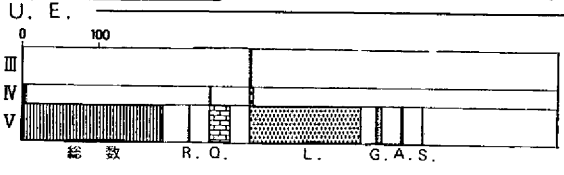
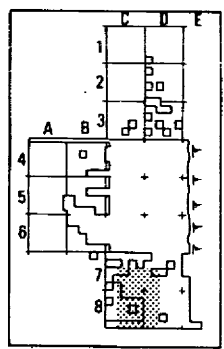
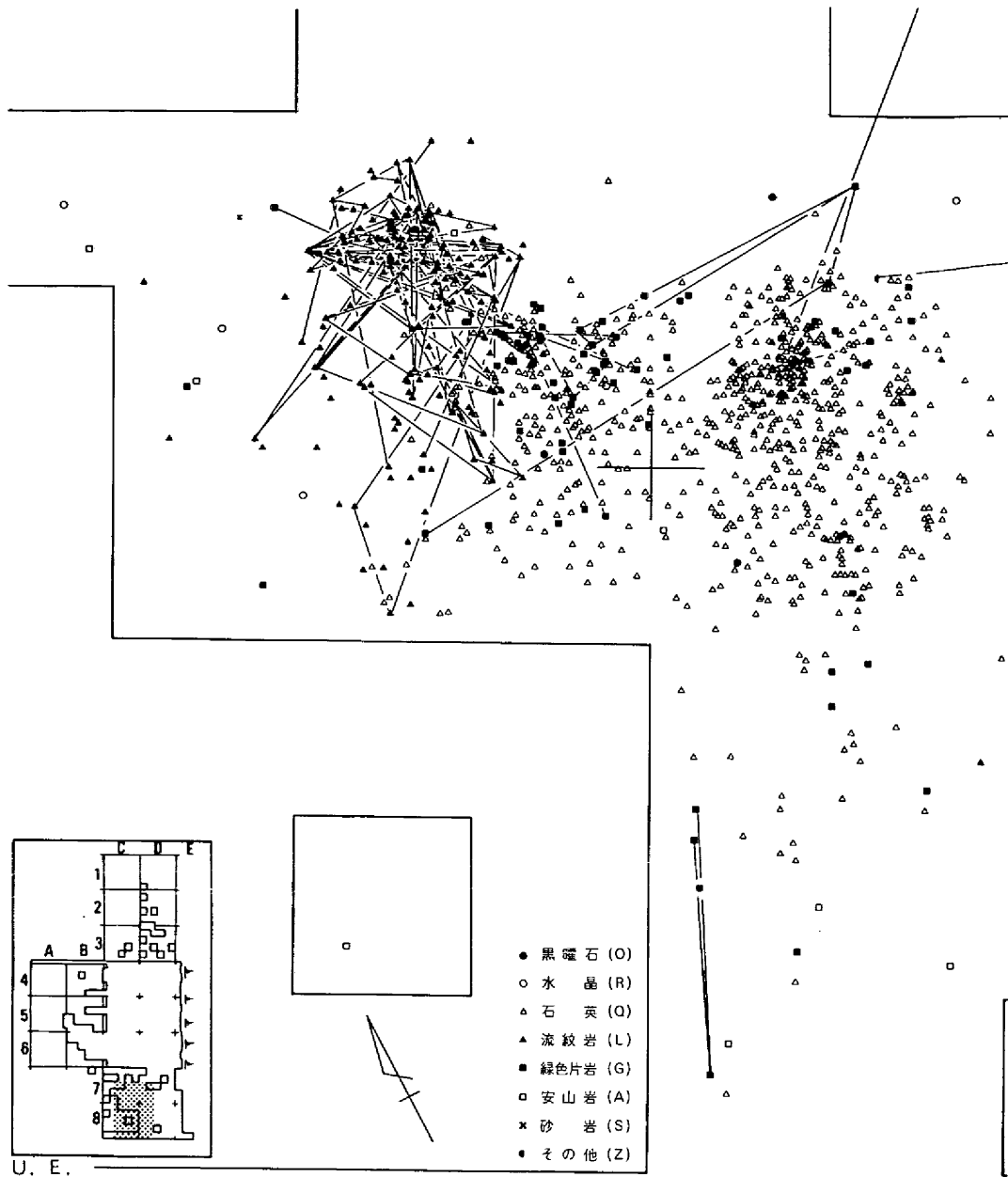
第12図 ユニットB・Cの器種分布図



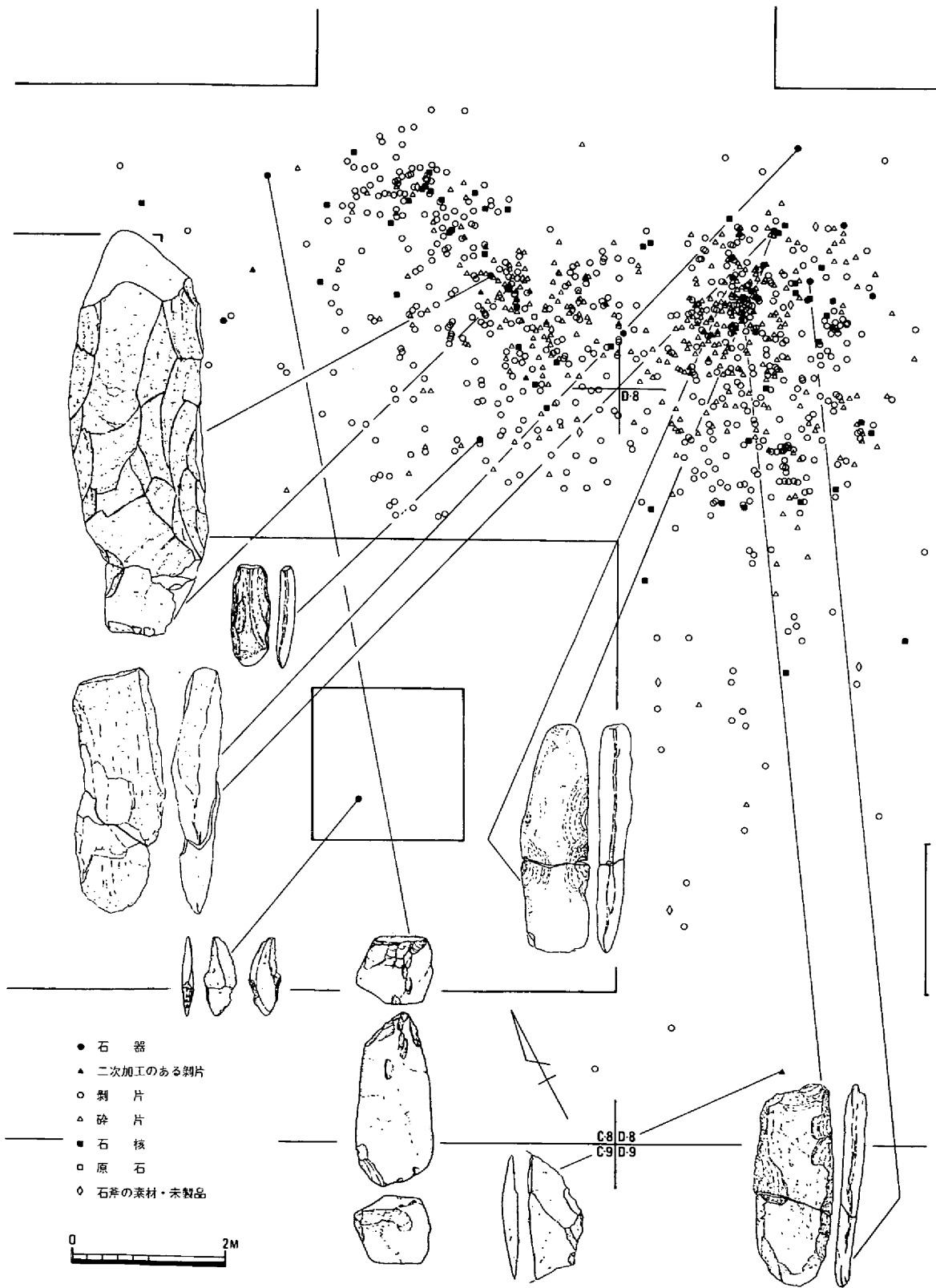
第13図 ユニットDの石材分布と接合関係図



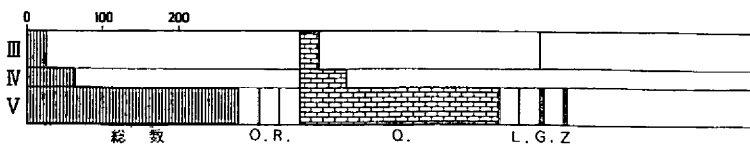
第14図 ユニットDの器種分布図



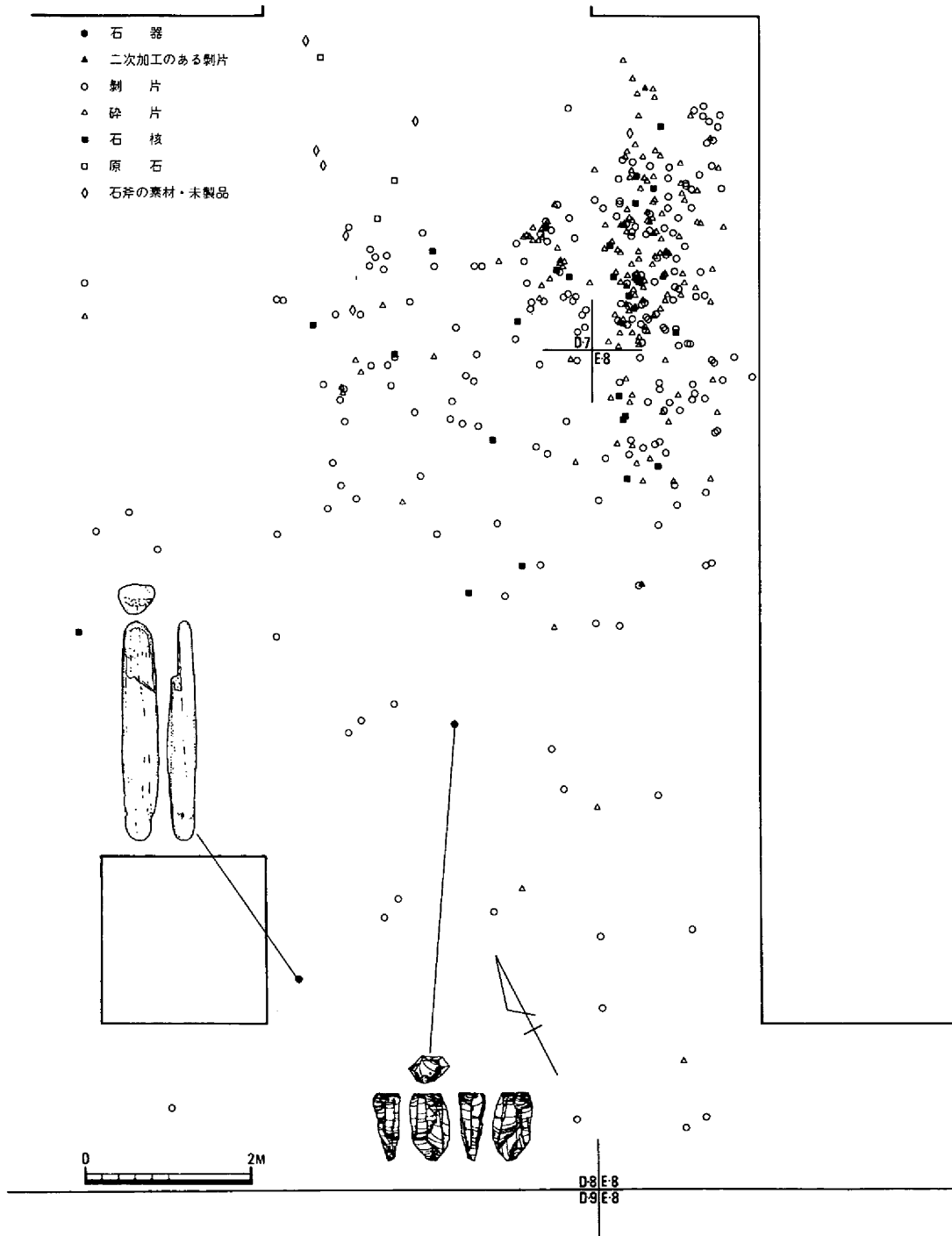
第15図 ユニットE・Fの石材分布と接合関係図



第16図 ユニットE・Fの器種分布図



第17図 ユニットGの石材分布と接合関係図



第18図 ユニットGの器種分布図

2. ユニットの石器

A. ユニットAの石器（第19図～22図）

ユニットAの石器・剥片類は水晶（1～16）と黒曜石（22～58）を主体に、玉髓（17）、安山岩（18～20）、砂岩（21）などの石材が用いられ、Ⅲ・Ⅳ層を中心にⅤ層まで認められる。

石器はナイフ形石器を主体に、楔形石器、錐、削器、投弾、ハンマーがある。

ナイフ形石器（1～11、23～38） 1～11は水晶製のナイフ形石器である1、8、9は基部の一侧辺、あるいは二側辺に表裏から緩やかな調整剥離を施し、基部を作出している。3、6は台形状を呈し、両側辺に急斜なブランティングが施される。11は刃部と考えられる側辺にも細かな調整剥離が施されている。4はナイフ形石器の基部と考えているが、欠損後に挟入削器に転用された可能性がある。これらの水晶製ナイフ形石器は、正面から裏面に向けて調整剥離を施すものが目立つ。

23～38は黒曜石製ナイフ形石器である。23～25は細長い台形状を呈し、器長に対して直角の直線刃部をもち、両側辺に調整剥離が施される。26は左側辺にブランティングを施し、右側辺は折断面をそのまま残す。

28～38は1～1.5cm内外の小型ナイフ形石器で、形状の整った小剥片を用い、原則的には打面を残し、その反対側に調整を施す（註1）。

楔形石器（13、39～42、45） 13は水晶製で、上下両端に細かな打痕が認められる。

39～42、45は黒曜石製で、上下両端に細かな打痕が認められ、一側辺にファシット状の面があるものと（39～42）、ファシット状の面が認められないもの（45）とがある。

錐（14、43、44） 14は水晶製、43、44は黒曜石製である。

削器（12、21、49～51） 12は良質の石英を用い、分厚い剥片の先端部に急斜な調整剥離を施し刃部としている。49、50は黒曜石製の挟入削器である。51は打面を除去しており、小剥片を剥離する石核とも考えられる。21は残核を削器にしたもので、砂岩製である。

二次加工のある剥片、使用痕のある剥片（46～48） 多数あるが図示できたのは3点であり、すべて黒曜石製である。

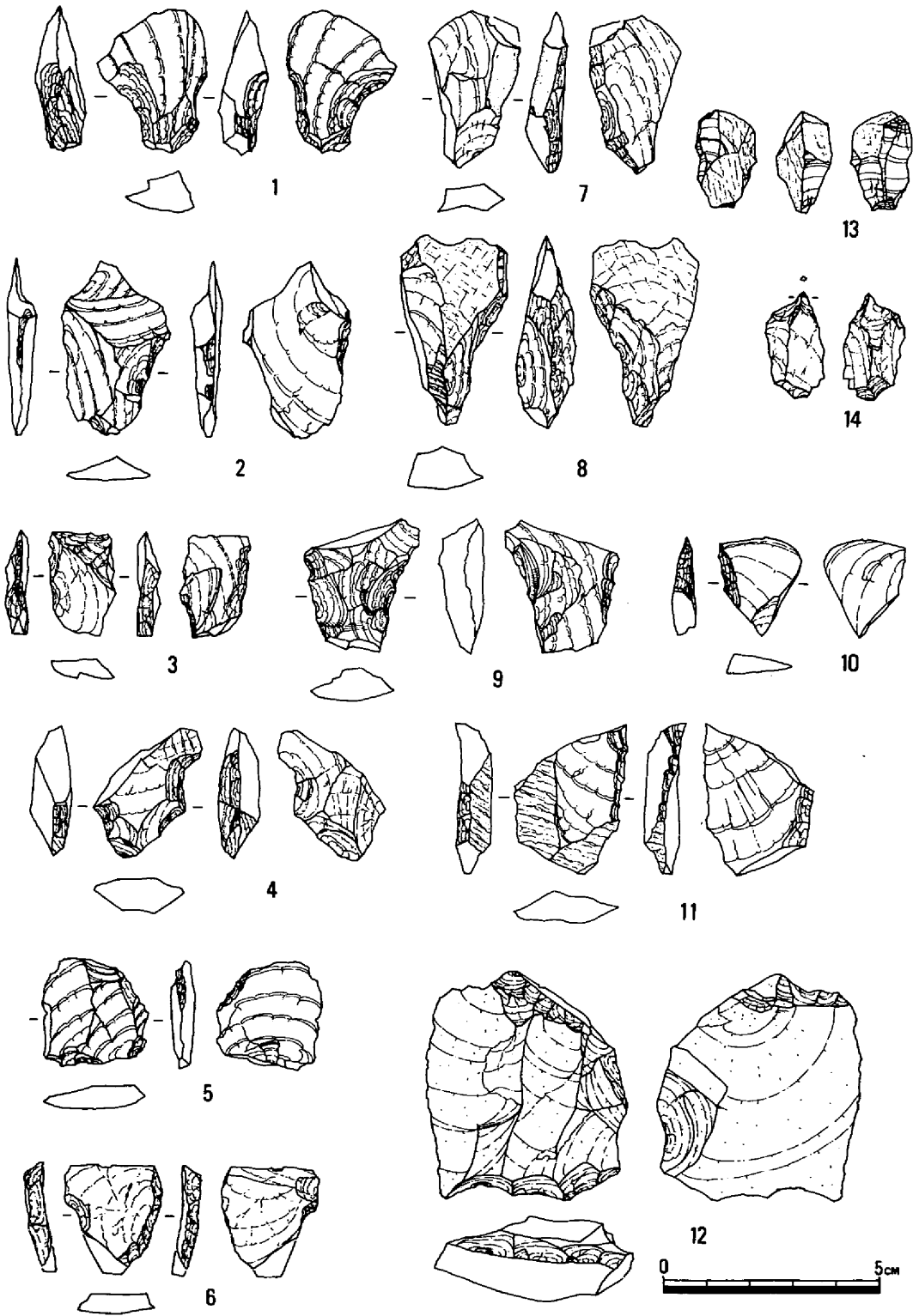
石核（15、52～59） 水晶（15）、黒曜石（52～58）ともに不定形の剥片を剥取する石核で、剥離面と打面が交互にくりかえされるものである。52～54は分厚い剥片に平坦な打面を作り、連続的に形状の整った小剥片を剥離している。58はサイコロ状を呈し、剥片剥離が進行するにしたがって小型化するが、一定の形状をした剥片が得られる。黒曜石製である。

B. ユニットBの石器（第23図）

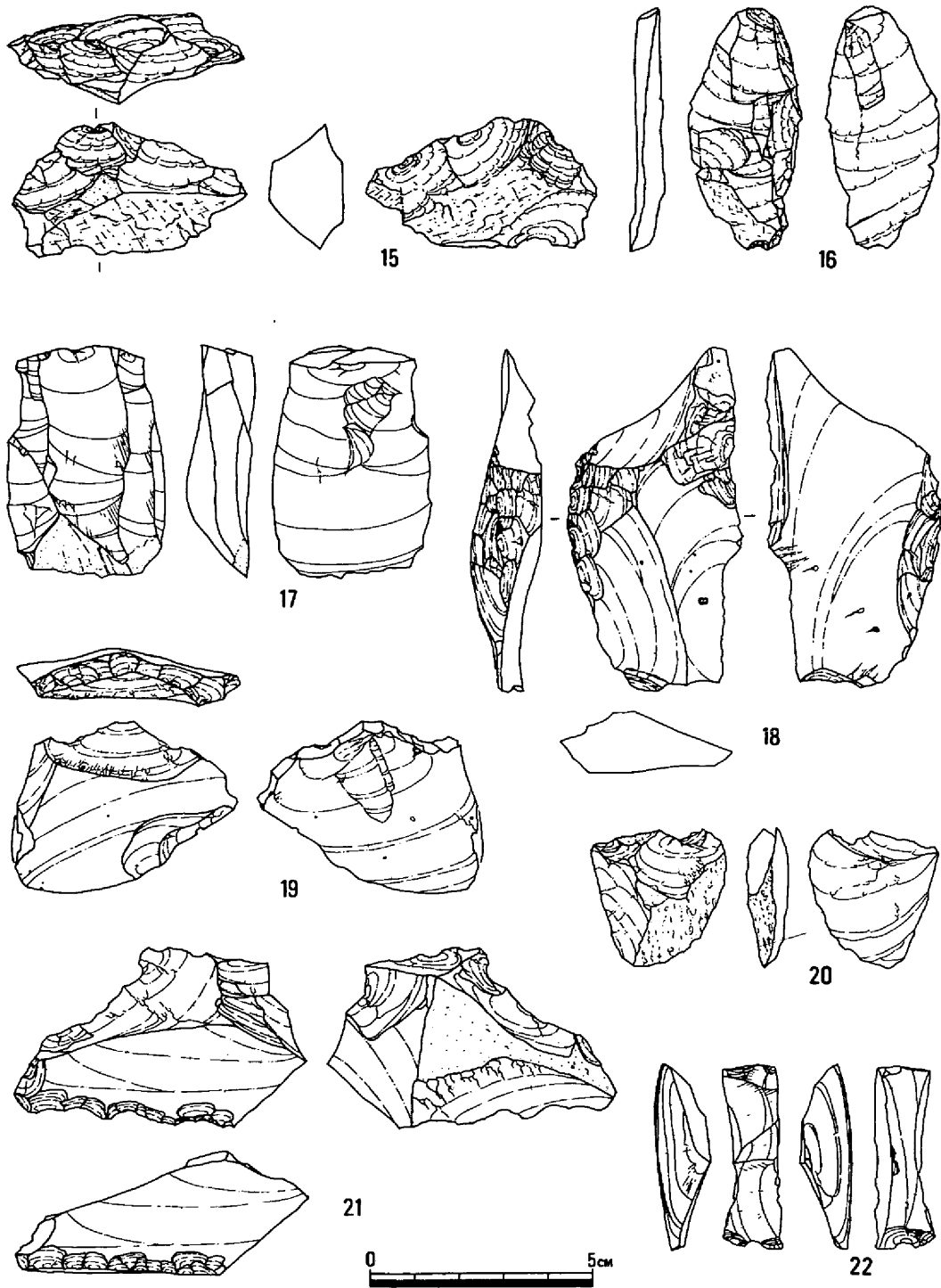
ユニットBの石器・剥片類は大部分がⅤ層に含まれており、石材は安山岩（1、3）、黒曜石（4）ハリ質安山岩（2）（註2）が用いられている。石器は1976年度調査時のナイフ形石器が一点と、今回の搔器がある。

搔器（1） 安山岩製の搔器で、基部を欠く。

C. ユニットCの石器（第24図）



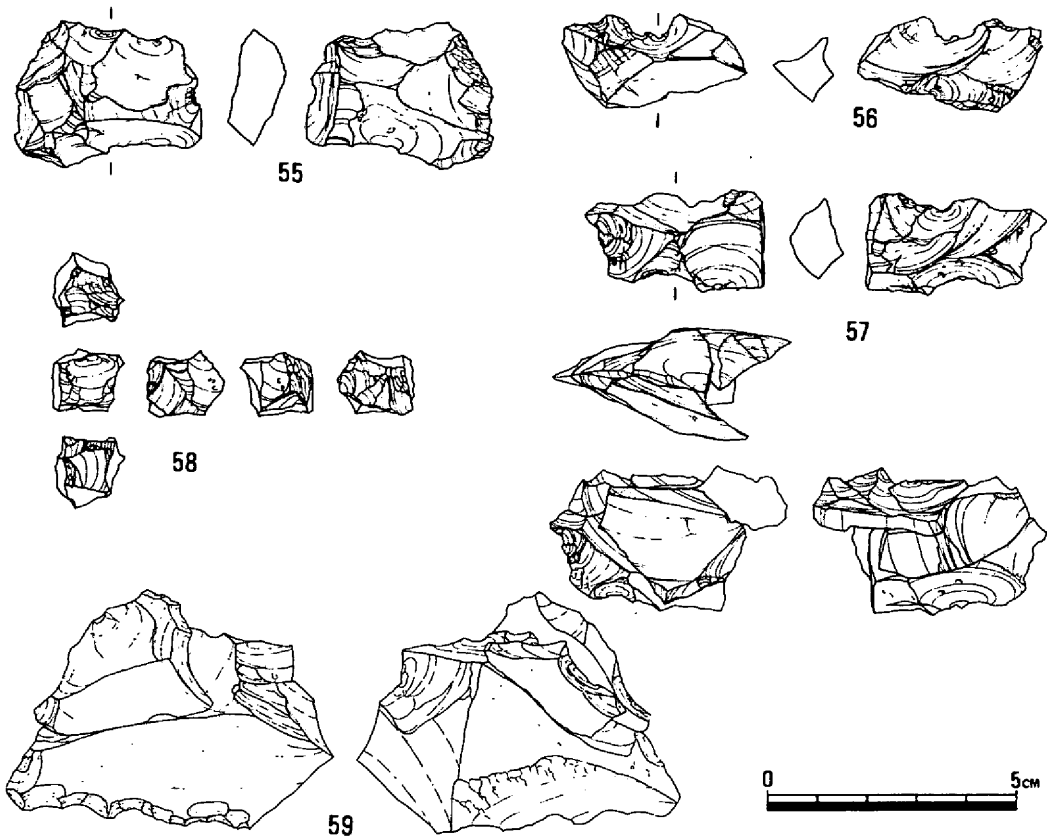
第19図 ユニットAの石器1



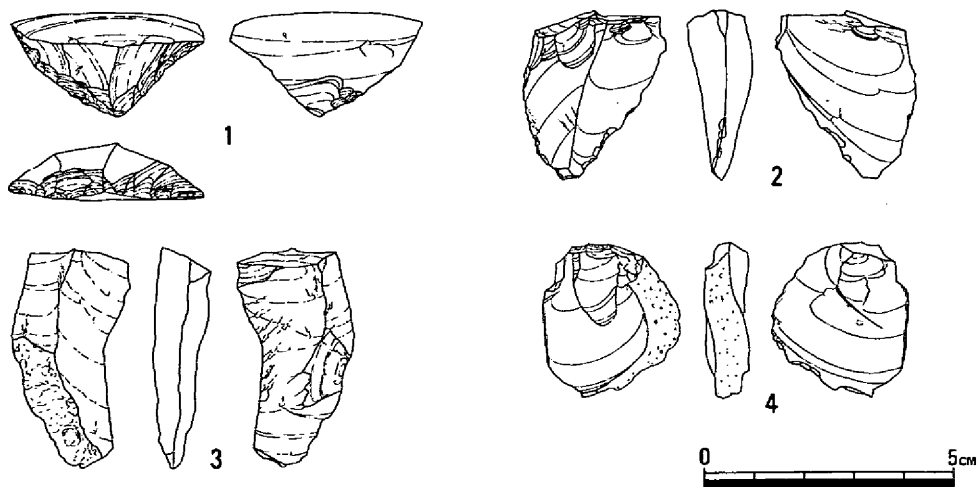
第20図 ユニットAの石器2



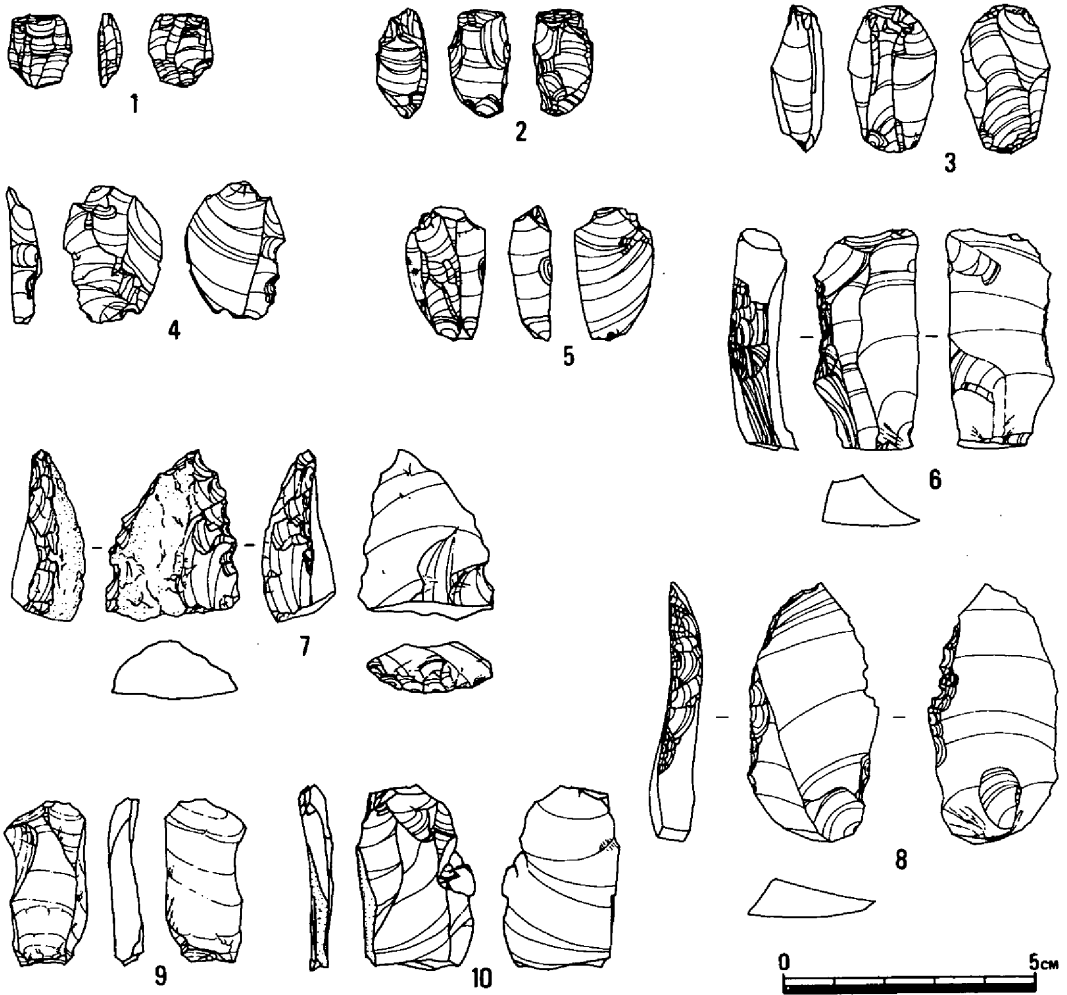
第21図 ユニットAの石器3



第22図 ユニットAの石器4



第23図 ユニットBの石器



第24図 ユニットCの石器

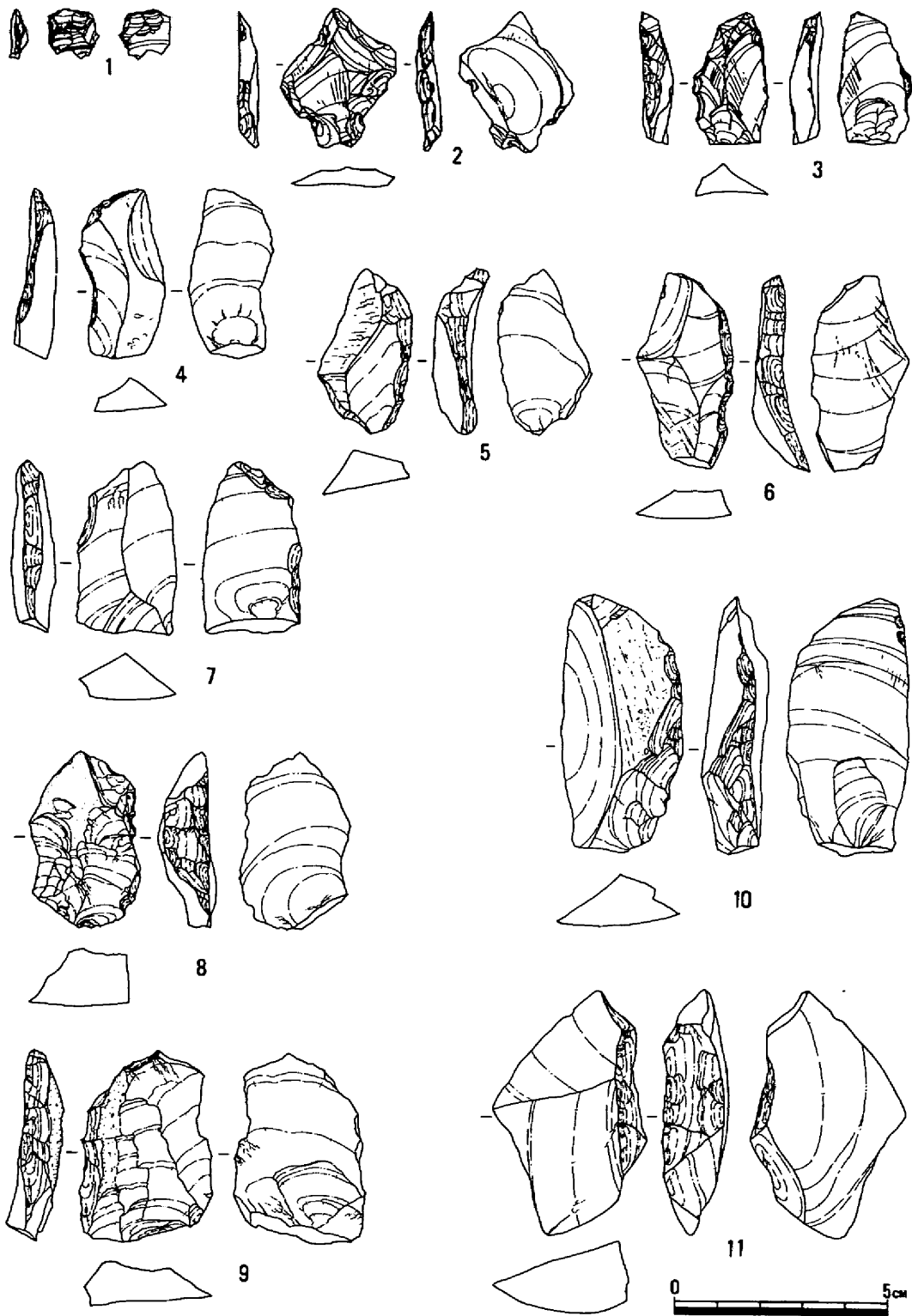
ユニットCを構成する石材は黒曜石（2、7）、ハリ質安山岩（1、3～6、8）、そして安山岩（9、10）であり、そのほとんどはⅤ層に含まれる。石器はナイフ形石器、楔形石器、尖頭状石器、ハンマーがある。

ナイフ形石器（6、8） 6、8はハリ質安山岩製のナイフ形石器で、縦長剝片の打面を残し、一側辺の基部以外に丁寧なブランディングが施される。

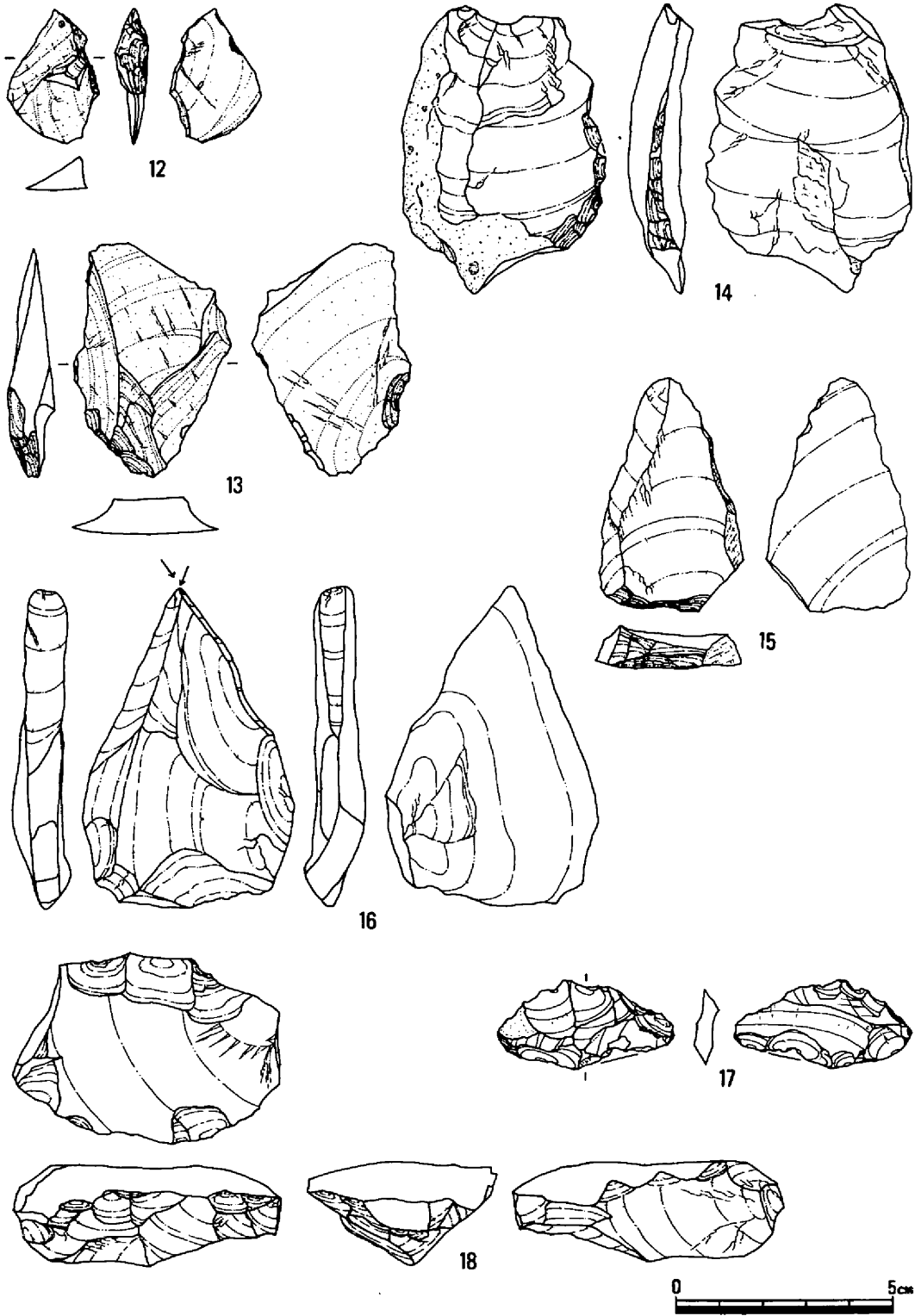
楔形石器（1～5） 黒曜石（2）とハリ質安山岩（1、3～5）で作られ、ファシット状の面がみられるもの（2、3、5）とないもの（1、4）とがある。

尖頭状石器（7） 正面に自然面を残す片面加工で、黒曜石を用いている。

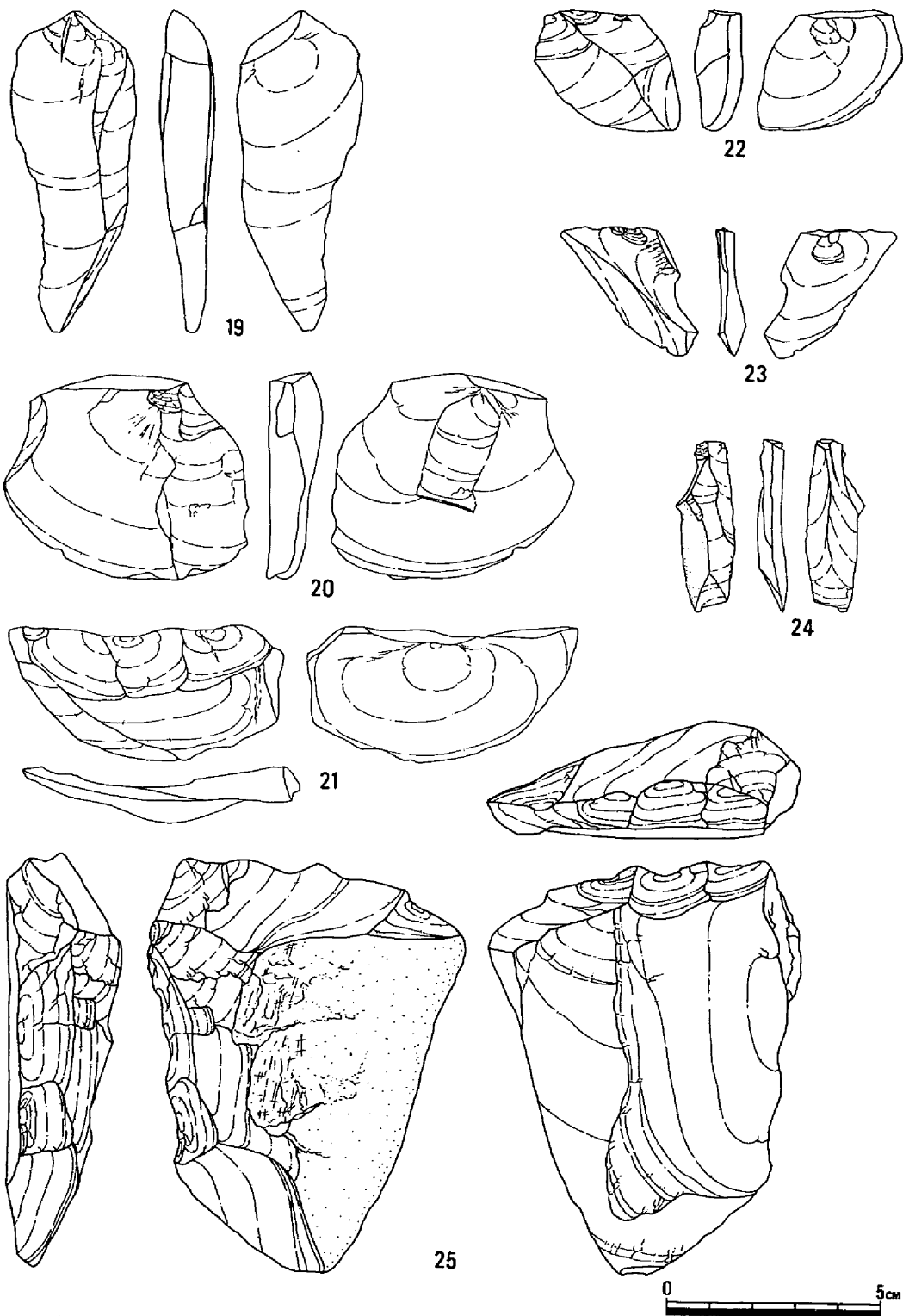
D. ユニットDの石器（第25図～27図）



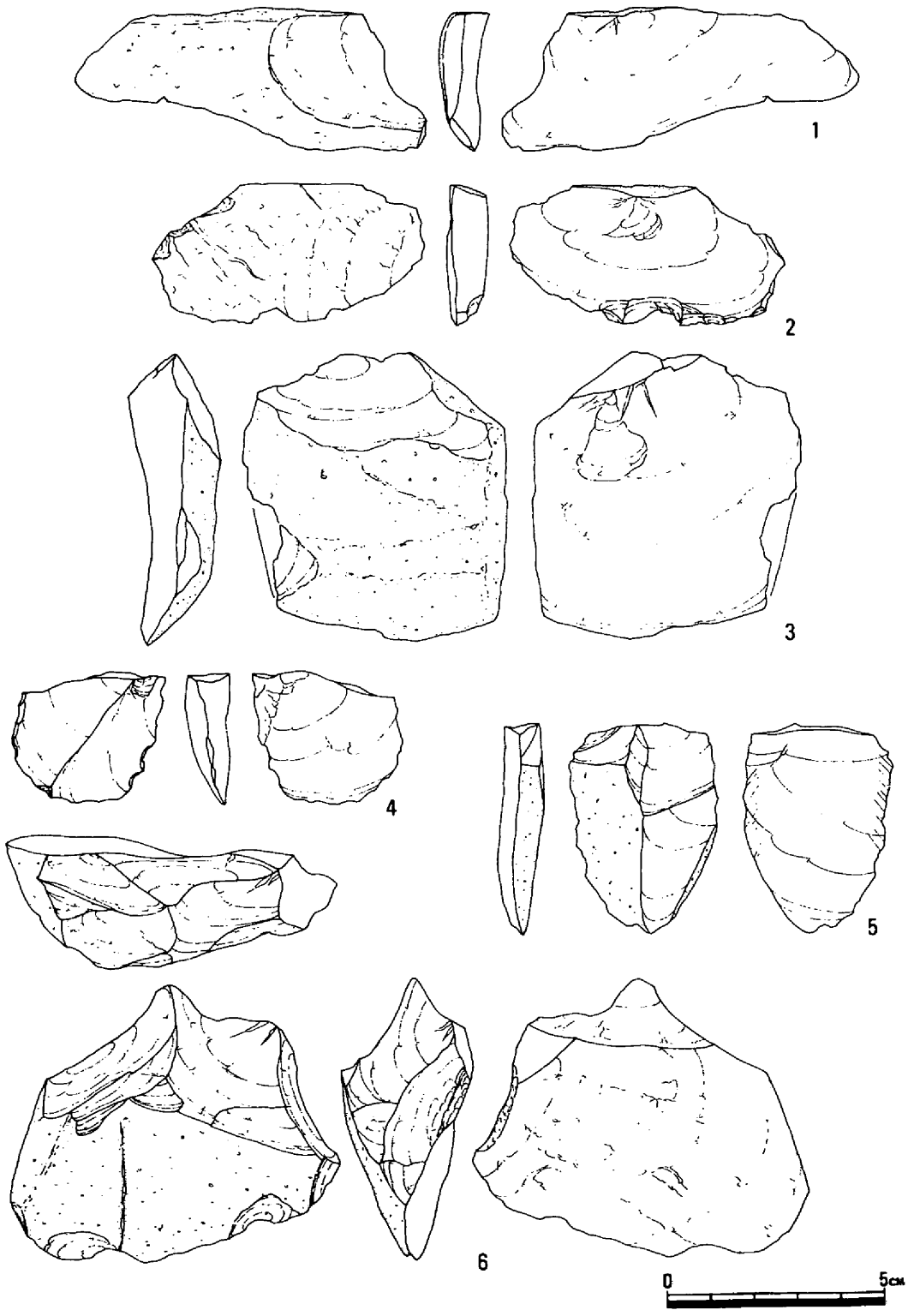
第25図 ユニットDの石器1



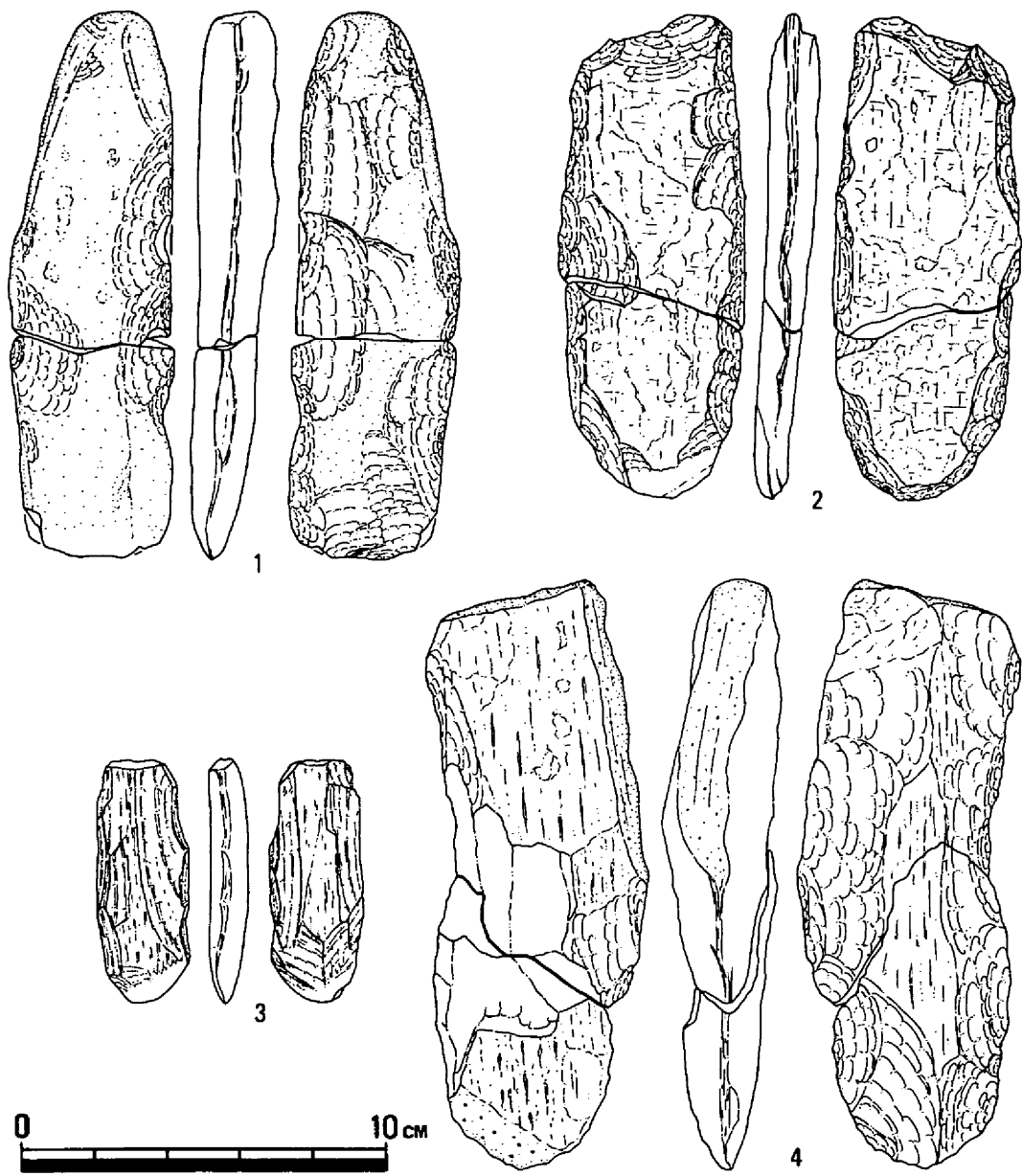
第26図 ユニットDの石器 2



第27図 ユニットDの石器 3



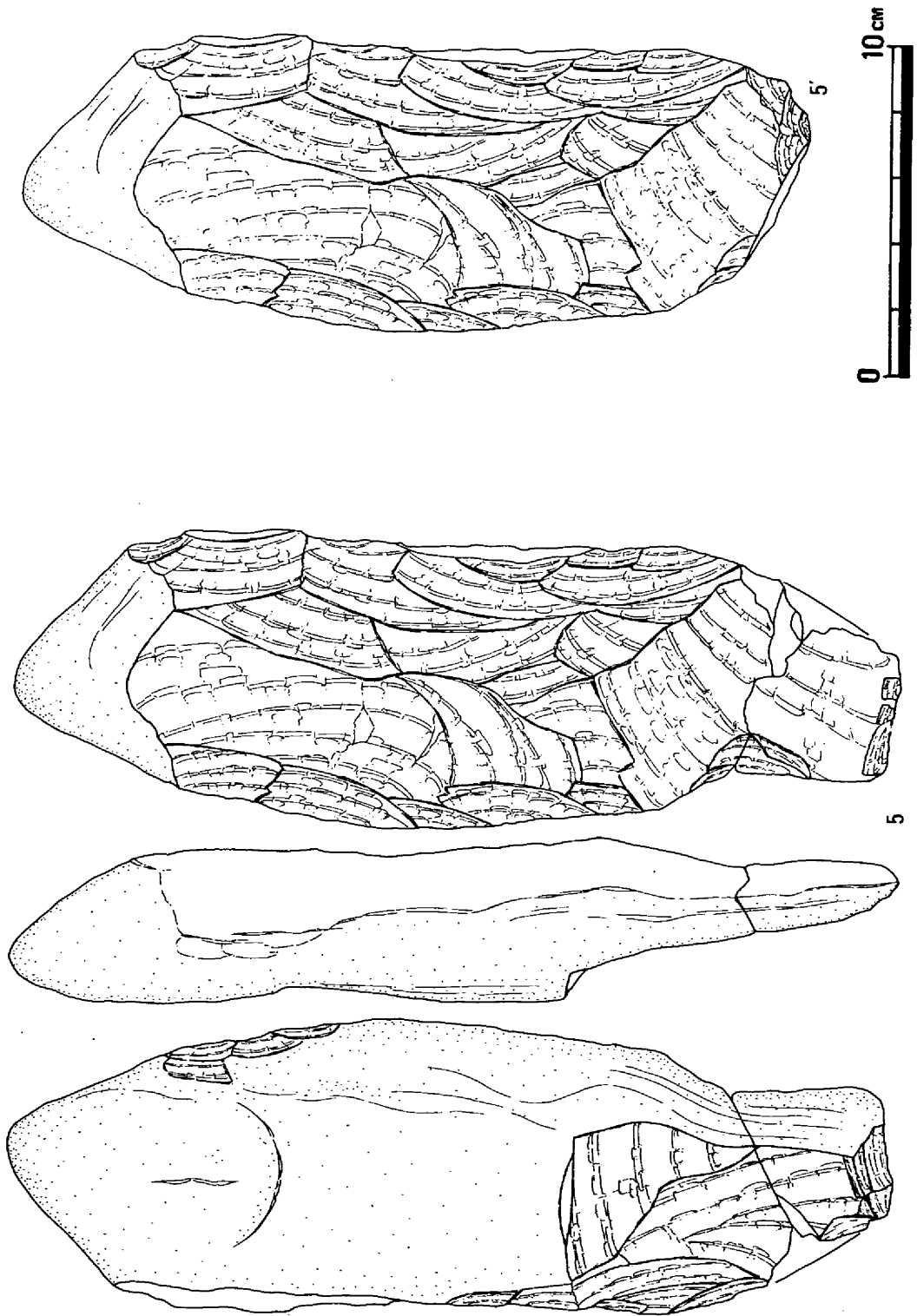
第28図 ユニットEの石器



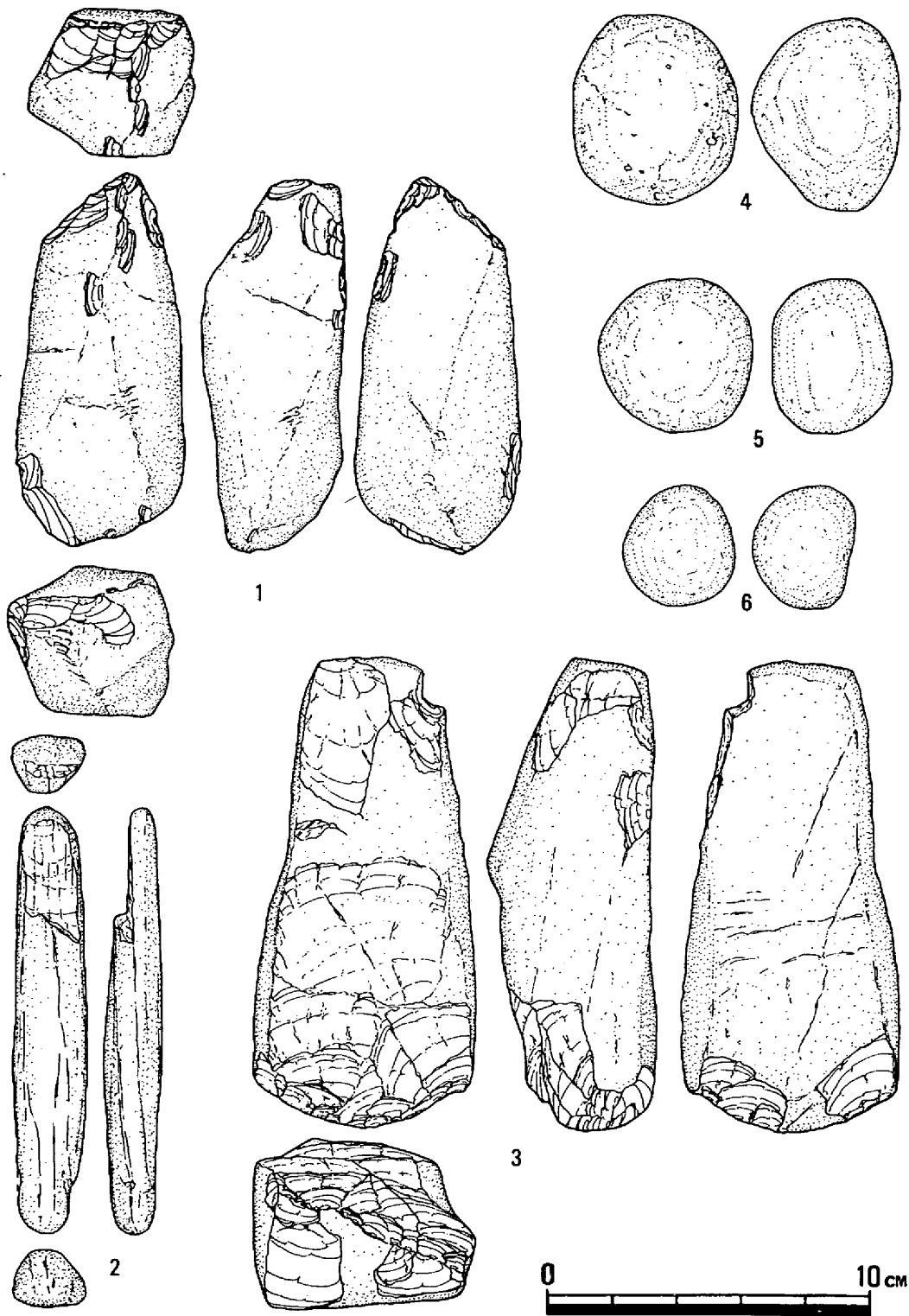
第29図 ユニットE・Fの石斧1

石材は流紋岩（4、5、7～9、14～16、18～25）を主体とし、砂岩（6、10、11）、安山岩（12、13）、黒曜石（1～3、17）が用いられる。石器にはナイフ形石器、彫器、搔器、ハンマーがある。これら石器・剝片類のほとんどはV層に含まれていた。

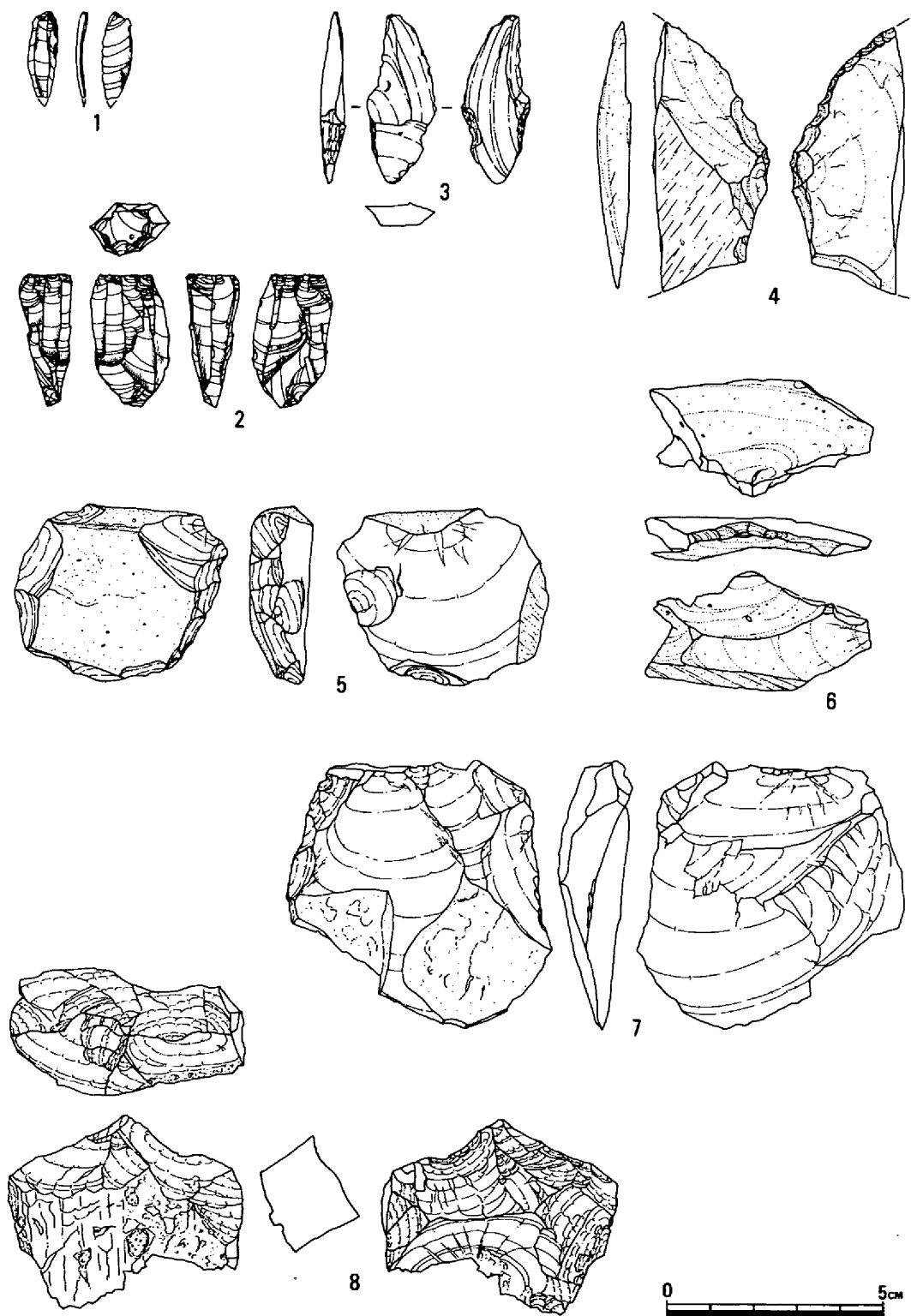
ナイフ形石器（3～13） 3、4、7～10は幅広な縦長剝片を用い、一側辺にブランディングを施



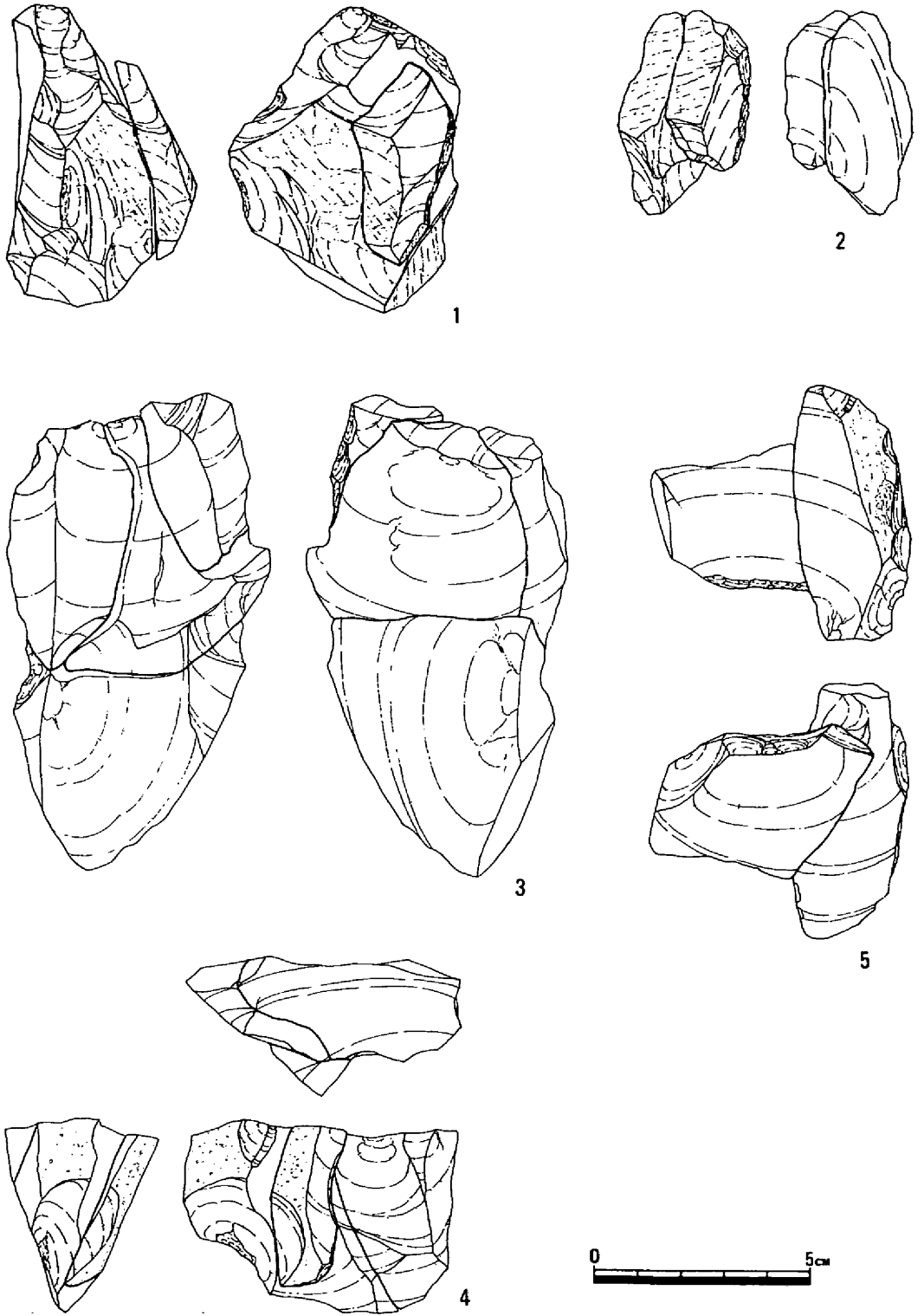
第30図 ユニットE・Fの石斧2



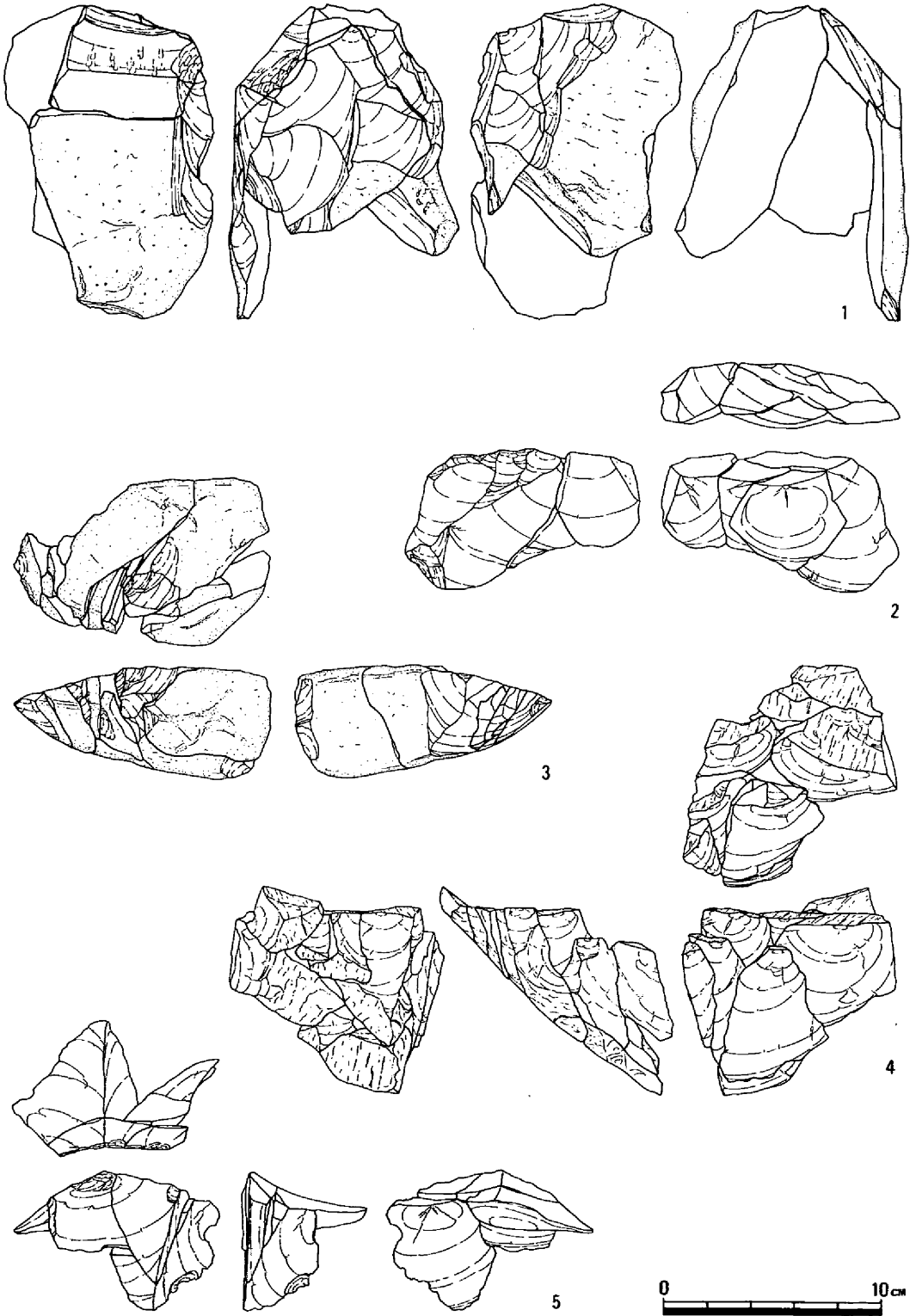
第31図 各ユニット出土のハンマーストーン・投弾



第32図 単独出土の石器



第33図 ナイフ形石器の接合資料



第34図 接合資料

し、他の側辺を刃部としている。いずれも基部に調整剝離は認められず、打面を残している。5、6、11、12、13は切出状のナイフ形石器である。11は砂岩製の厚手の横長剝片を利用し、一側辺に表裏からブランディングを施す。

彫器 (16) 流紋岩製で、2打の彫刻刀面が作られている。

搔器 (15) 流紋岩製の搔器である。刃部はあまり丁寧な作りではない。

削器 (2、14) 14は幅広の縦長剝片の側辺に刃部が認められる。流紋岩製である。2は黒曜石製の挟入削器である。

石核 (18、25) 流紋岩製の石核は不定形の比較的大形の剝片を剝離するものである。25は小さな剝離面が認められ、打面が除去されているが、石核と考えるか、石器と考えるか判断しがたい。

E. ユニットEの石器 (第28図)

石材は流紋岩を主体としておりV層に含まれる。石器は砂岩製のハンマーストーン (第31図1) 1点と石斧 (第30図5) のみで、他に剝片、碑片、石核がある。石斧は刃部欠損後に再成している。

F. ユニットFの石器 (第29図)

ユニットFは大部分がV層に含まれ、石英を主体とし、緑色片岩を含む。石器は石斧のみである。

石斧 (1～6) すべて緑色片岩で作られており、1～3は刃部に磨痕が認められる。3以外はすべて刃部が折れていた。

G. ユニットGの石器

ユニットGは石英のみで構成され、大部分がV層に含まれる。石器は1点もなかった。

H. 単独出土の石器 (第32図)

1は表採資料で、黒曜石製の細石刃である。2は黒曜石製の円錐形細石核である。3は安山岩製ナイフ形石器である。8は水晶製の石核である。

I. 接合資料 (第33図、34図)

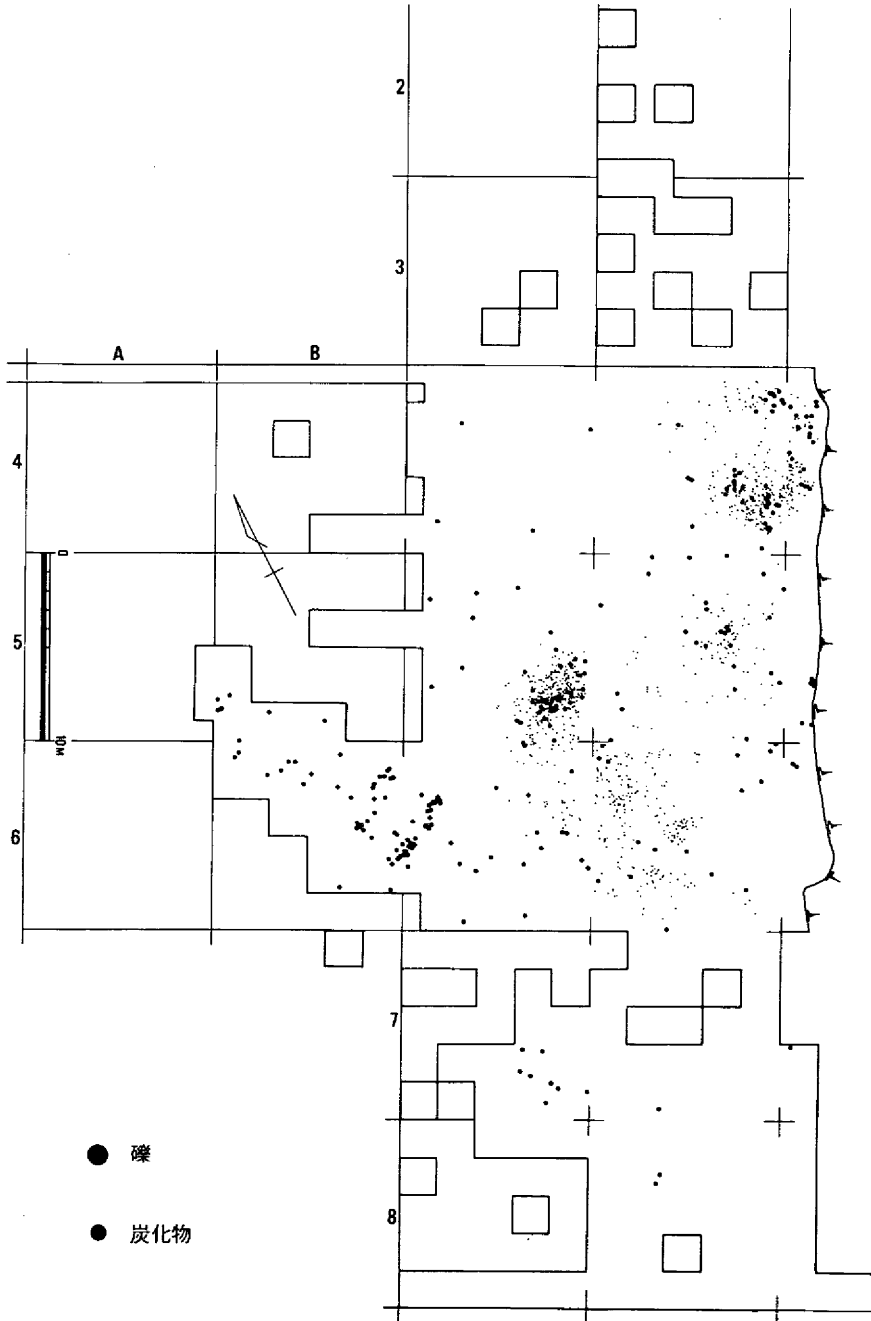
第33図1～5はナイフ形石器の接合資料で、5は砂岩、その他は流紋岩である。第34図1～5も流紋岩の接合資料である。

註

註1 この小型のナイフ形石器は、小石刃を折断した台形石器などとは異なり、規画的な小剝片の打面と反対側に調整を施し、他の二側辺が刃部となっている。この石器の素材となる小剝片は、第21図の52～54のような石核から連続的に剝離されたものであり、細石器と類似している。このようなナイフ形石器は現在のところ他地域に類例がなく、野原遺跡群で特徴的に認められる。

註2 鈴木正男氏に原産地の同定をお願いしたところ、ガラスでない(黒曜石でない)という結果をいただいたが、その名称については不詳であった。長崎県定産の黒曜石に酷似し、破れ口は黒曜石そのものであるが透明度が弱い。ハリ質安山岩に類似しており、断定するまでにいたらないが、一応ハリ質安山岩としておく。

3. 礫群と炭化物



第35図 礫・炭化物分布全体図

礫群は6か所認められ、その他にも単独で礫が出土している。単独出土のものについては焼け礫もあるが、焼けていない礫が多く、石器製作用の原材として持ち込まれた可能性もある。ここで礫群と呼ぶものは、一定の範囲に集中する礫のまとまりをさし、礫の形状や大小、あるいは規模によって配石とか礫群とかに区別はしていない。

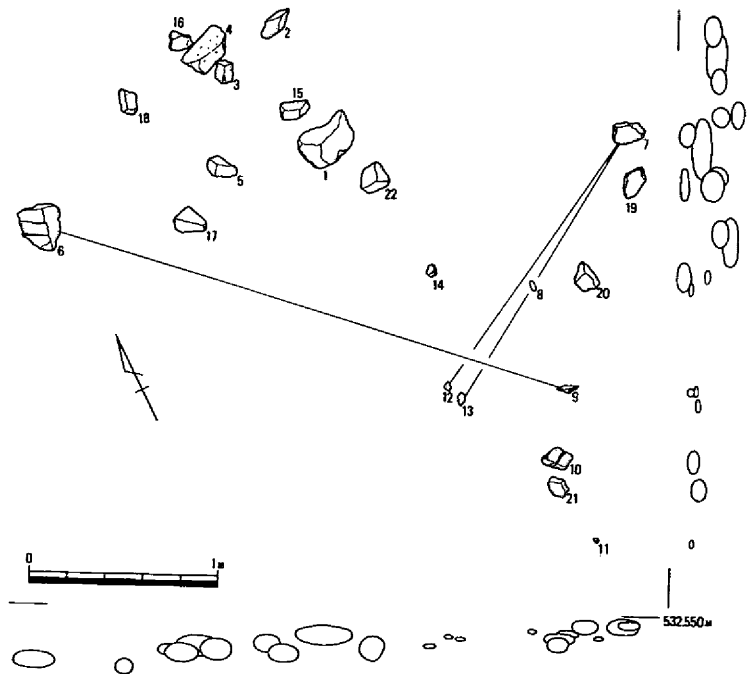
礫群は石器・剝片類に比べ、レベルが安定しており、礫群ⅠはⅢ層とⅣ層との境に、その他はⅤ層上面、あるいはⅤ層中に含まれていた。これらの礫群はほぼ層位の傾斜に添っていることから、当時の生活面に置かれたものと考えられ、少なくともⅢ・Ⅳ層と、Ⅴ層とに生活面があったことが推定される。

礫群を構成する礫は、周辺で産出する流紋岩を多く用いており、約20から30個前後の小礫で構成されるもの、あるいは人頭大の礫で構成されるものなど、バラエティがある。これらのほとんどは良く焼けており、ススの付着するものもある。

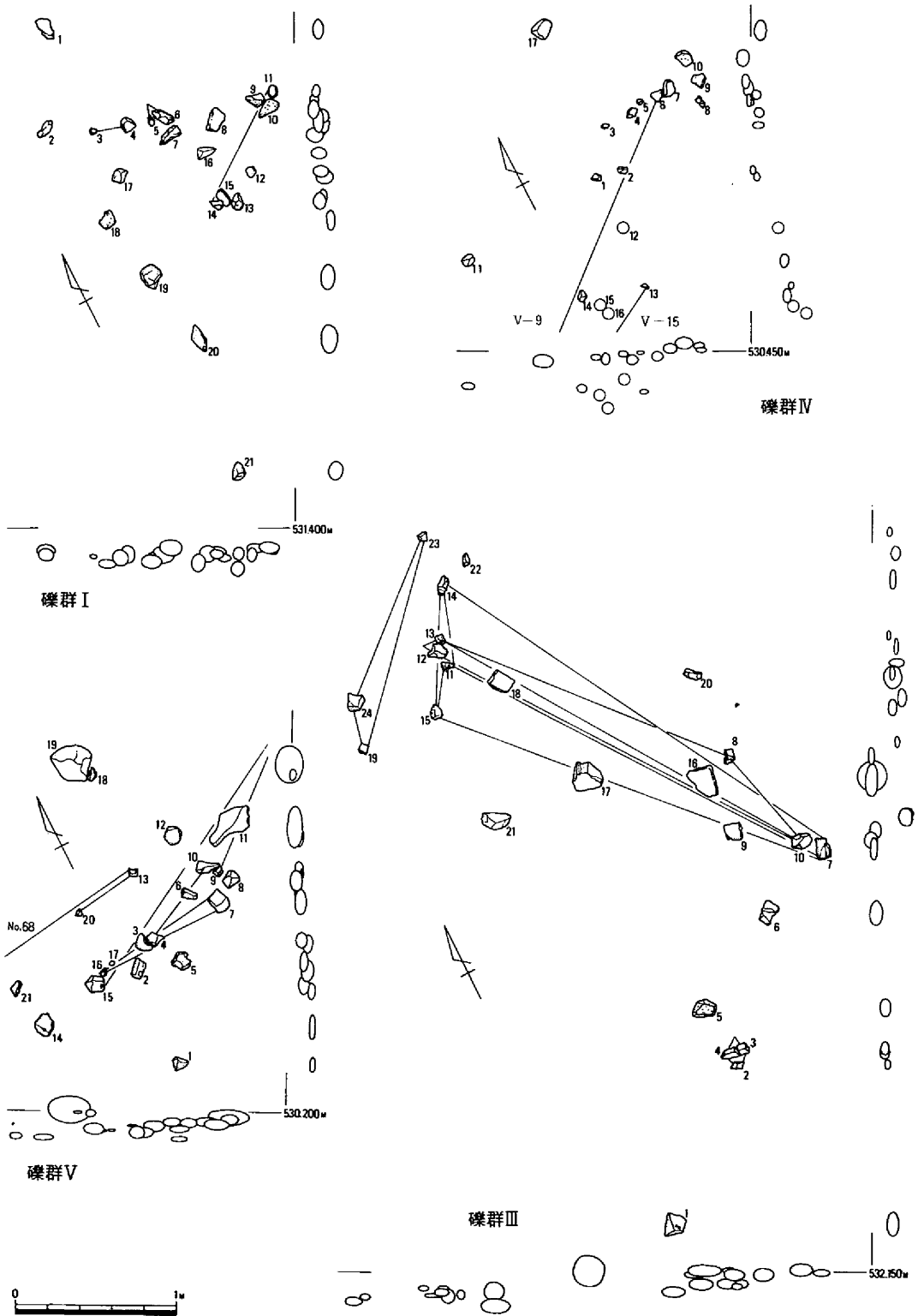
これらの礫群と各ユニットとの関係を見ると、E、F、Gのユニットには礫群が認められないが、その他のユニットには礫群が含まれている。

礫の接合関係をみると、だいたい礫群の中でまとまっているが、礫群ⅣとⅤは接合関係が多く、同じ礫群と考えてもよいと思われる。

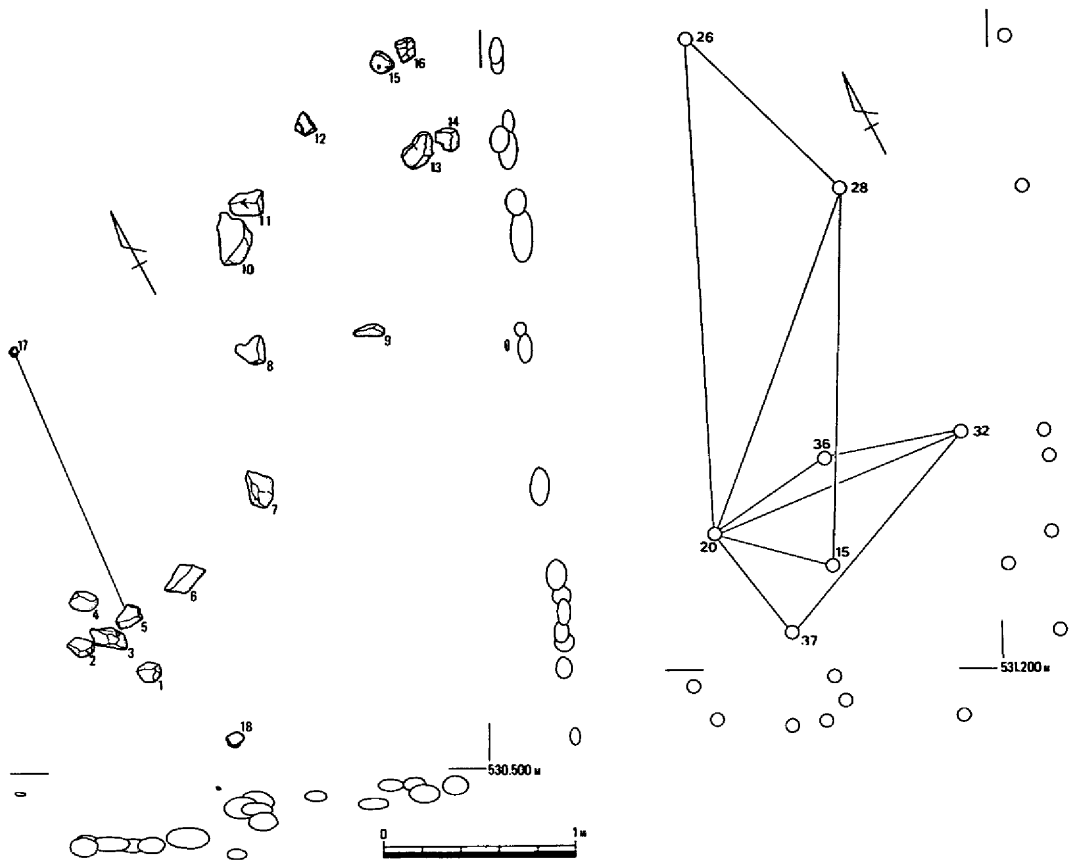
また礫群Ⅳ以外にはすべて炭化物が伴っている。炭化物はC、D列の4、5、6については検出作業を行なったが、その他のグリッドについては霜などの悪条件が重なったため実施することができなかった。しかし炭化物の有無だけは確認した。



第36図 礫群Ⅱの接合及び実測図



第37図 礫群I・III・IV・Vの接合及び実測図



第38図 礫群VIの接合及び実測図(左)と礫群I下層の礫接合図(右)

表1. 礫接合関係一覧表

No.	接合と接合面の関係		接合タイプ		No.	接合と接合面の関係		接合タイプ		復原率
	接合タイプ	復原率	接合タイプ	復原率		接合タイプ	復原率			
1	II-9	II-6	E	b	13	II-8	II-10	A	b	
2	I-3	I-4	A	a		II-13	II-12	C	a	
3	I-5	I-6	A	a	14	V-4	V-7	C	a	
4	I-11	I-14	A	c		V-10	V-16	A	a	
5	V-15	IV-13	B	a	15	No. 20	No. 32	C	b	
6	VI-5	VI-17	B	a		No. 15	No. 26	D	b	
7	IV-6	V-9	C	b		No. 28	No. 37	E	b	
8	II-3	I-4	A	c	(凡例) 焼け礫 (filled box) 焼けていない礫 (empty box) ○-○ 接合面のいずれも焼けていないもの ○-● 接合面のいずれかが焼けているもの ●-● 接合面のいずれもが焼けているもの 接合タイプ: A (○-○), B (○-●), C (●-●), D (○-○ with dot), E (○-○ with dot) 復原率: a (100%復原), b (80%以上復原), c (50%以上復原), d (50%以下復原)					
9	II-7	I-4	C	b						
10	II-12	II-13	A	c						
11	II-23	II-24	C	b						
12	II-18	II-24	A	a						
12	No. 68	No. 20	C	b						
12	V-13	V-20	A	a						
12	II-7	II-11	A	a						
12	II-14	II-15	A	a						

番号	位置 (cm)			層位	石質	大きさ	法量 (cm)			重量 (g)	赤化	黒色付着物	破損面タイプ	番号	位置 (cm)			層位	石質	大きさ	法量 (cm)			重量 (g)	赤化	黒色付着物	破損面タイプ
	グリッド	N	E				長さ	幅	厚さ						グリッド	N	E				長さ	幅	厚さ				
群 I														群 IV													
I-1	C5	729	316	上	B	A	15.0	8.9	5.6	980	△	△	-	IV-1	C6	377	869	V	A	A	6.1	5.1	4.1	140	△	×	-
I-2	C5	792	316		B	A	11.4	6.2	6.1	570	○	×	-	IV-2	C6	373	853		A	B	4.6	3.5	3.1	60	△	×	c
I-3	C5	793	286		A	D	4.6	4.1	1.0	20	○	×	a	IV-3	C6	347	863		A	C	5.0	4.0	2.1	50	○	△	c
I-4	C5	789	261		A	B	9.4	7.6	5.8	480	○	×	a	IV-4	C6	338	847		A	B	8.7	5.2	4.0	190	○	×	c
I-5	C5	787	249		B	D	5.9	3.9	3.1	60	○	△	a	IV-5	C6	331	842		A	B	3.6	2.8	1.7	20	×	×	-
I-6	C5	785	243		B	B	11.5	10.0	5.6	870	○	×	a	IV-6	C6	328	832		A	C	8.7	6.5	4.6	200	△	×	c
I-7	C5	796	238		A	A	15.8	7.6	6.8	890	△	×	-	IV-7	C6	323	824		A	A	11.2	5.8	5.8	380	○	×	-
I-8	C5	787	210		B	A	13.4	8.9	5.4	920	△	×	-	IV-8	C6	332	806		-	-	-	-	-	-	-	-	-
I-9	C5	774	185		C	B	12.3	9.2	3.3	460	△	×	c	IV-9	C6	319	806		A	A	9.0	8.0	4.7	320	○	×	-
I-10	C5	779	177		B	B	15.5	8.0	6.4	920	△	○	a	IV-10	C6	305	814		A	A	10.5	7.6	5.6	350	○	×	-
I-11	C5	769	174		D	D	8.8	6.5	1.2	120	△	○	a	IV-11	C6	431	948		B	A	6.9	5.5	3.3	200	×	×	-
I-12	C5	818	188		B	A	8.8	6.4	6.3	500	○	△	-	IV-12	C6	409	850		-	-	-	-	-	-	-	-	-
I-13	C5	837	196		C	C	9.6	6.6	6.4	440	○	△	c	IV-13	C6	442	840		A	D	5.8	3.0	1.8	20	○	×	a
I-14	C5	838	208		C	C	7.4	5.3	3.9	160	△	△	a	IV-14	C6	449	878		A	C	7.4	4.7	8.4	110	○	×	c
I-15	C5	834	205		B	B	11.2	8.9	5.4	490	○	△	a	IV-15	C6	455	865		-	-	-	-	-	-	-	-	
I-16	C5	807	216		B	A	10.7	10.2	6.2	810	○	×	-	IV-16	C6	460	862		-	-	-	-	-	-	-	-	
I-17	C5	821	269		A	A	10.8	9.7	7.1	880	○	×	-	IV-17	C6	289	901		A	A	12.4	7.7	8.6	870	○	×	-
I-18	C5	843	277		B	A	11.6	9.5	4.1	330	△	△	-	群 V													
I-19	C5	882	250		B	B	14.5	14.2	7.0	1,440	△	×	c	V-1	C6	669	958	V	A	A	8.9	7.4	5.4	290	○	△	-
I-20	C5	919	221		A	C	18.1	13.7	3.1	1,010	△	×	a	V-2	C6	610	992		A	B	15.2	7.6	7.3	940	○	△	c
I-21	C5	1003	196		B	A	8.7	6.3	2.5	190	△	○	-	V-3	C6	596	990		A	A	12.1	10.6	4.3	540	○	×	-
群 II														V-4	C6	591	982		D	D	10.5	8.3	6.8	570	○	△	c
II-1	D4	193	6	V	A	A	33.5	25.0	9.0	6,000	×	△	-	V-5	C6	610	966		A	B	11.8	9.7	4.5	540	○	×	c
II-2	D4	130	31		A	A	20.3	10.3	5.9	1,590	○	△	-	V-6	C6	564	961		A	A	9.2	5.3	4.4	290	○	×	-
II-3	D4	156	61		B	B	11.6	9.0	5.8	860	○	△	a	V-7	C6	569	943		D	D	9.4	5.5	7.1	520	○	△	b
II-4	D4	145	70		A	A	24.8	16.6	6.6	3,760	○	△	-	V-8	C6	555	936		A	A	10.8	8.7	6.1	640	△	×	-
II-5	D4	206	61		B	A	16.2	10.7	9.2	1,880	○	△	-	V-9	C6	550	944		A	C	6.2	3.8	3.0	60	△	×	c
II-6	D4	239	157		A	B	24.5	22.0	7.9	4,640	×	×	a	V-10	C6	547	951		D	D	12.5	6.3	5.3	280	○	×	c
II-7	E4	182	848		A	B	15.5	12.2	6.4	1,480	○	○	c	V-11	C6	521	936		A	A	32.0	14.5	8.1	4,680	×	×	-
II-8	E4	263	896		A	D	3.6	3.5	0.6	-	○	×	c	V-12	C6	529	972		B	A	9.4	6.7	4.5	440	×	△	-
II-9	E4	317	876		A	D	9.2	4.5	3.5	100	×	×	a	V-13	C6	551	996		A	D	4.7	4.0	1.3	30	○	△	c
II-10	E4	354	881		A	B	17.1	12.6	5.6	1,360	○	△	c	V-14	B6	645	50		A	B	11.2	9.3	3.3	450	△	△	b
II-11	E4	397	860		A	D	1.9	1.1	0.4	-	○	×	c	V-15	B6	620	19		A	B	10.0	8.2	4.0	540	○	△	c
II-12	E4	318	940		A	D	4.0	2.2	1.0	-	○	△	c	V-16	B6	612	14		D	D	4.0	3.0	1.6	20	○	×	b
II-13	E4	324	933		A	D	5.3	3.2	0.7	-	○	△	c	V-17	B6	606	9		-	-	-	-	-	-	-	-	
II-14	E4	258	950		C	A	5.9	5.0	3.0	110	△	×	-	V-18	B6	491	21		A	A	8.1	5.0	4.3	200	×	×	-
II-15	D4	175	24		B	C	15.5	9.9	7.4	1,330	×	△	a	V-19	B6	484	31		B	A	27.5	15.5	18.0	6,000	×	×	-
II-16	D4	140	84		B	D	10.7	9.1	4.7	860	×	×	a	V-20	B6	577	29		A	D	4.7	3.9	1.1	20	○	△	c
II-17	D4	235	77		-	-	-	-	-	-	-	-	V-21	B6	620	63		A	A	9.7	5.5	3.7	200	○	△	-	
II-18	D4	172	12		A	A	12.5	10.5	6.3	920	×	△	-	群 III													
II-19	E4	208	844		-	-	-	-	-	-	-	-	III-1	D4	968	123	V	A	B	14.1	17.0	6.8	1,580	△	△	a	
II-20	E4	259	868		A	A	14.0	10.5	7.6	1,203	×	×	-	III-2	D4	872	94		A	D	8.7	4.6	3.2	120	○	△	a
II-21	E4	369	881		A	A	11.4	9.1	7.0	960	×	△	-	III-3	D4	861	81		A	D	7.1	6.1	4.7	310	○	×	a
II-22	E4	210	980		A	A	19.3	17.5	10.0	2,810	×	△	-	III-4	D4	864	88		A	D	9.7	5.7	4.1	420	○	×	a
群 III														III-5	D4	837	104		B	B	16.2	11.0	6.3	1,340	○	×	a
III-1	D4	968	123	V	A	B	14.1	17.0	6.8	1,580	△	△	a	III-6	D4	776	64		B	B	15.9	11.3	7.3	1,380	○	×	c
III-2	D4	872	94		A	D	8.7	4.6	3.2	120	○	△	a	III-7	D4	739	32		B	C	14.7	10.7	4.8	980	○	×	a
III-3	D4	861	81		A	D	7.1	6.1	4.7	310	○	×	a	III-8	D4	684	88		B	D	9.8	6.4	3.4	170	○	×	a
III-4	D4	864	88		A	D	9.7	5.7	4.1	420	○	×	a	III-9	D4	728	87		A	A	12.0	10.1	6.9	830	○	×	-
III-5	D4	837	104		B	B	16.2	11.0	6.3	1,340	○	×	a														
III-6	D4	776	64		B	B	15.9	11.3	7.3	1,380	○	×	c														
III-7	D4	739	32		B	C	14.7	10.7	4.8	980	○	×	a														
III-8	D4	684	88		B	D	9.8	6.4	3.4	170	○	×	a														
III-9	D4	728	87		A	A	12.0	10.1	6.9	830	○	×	-														

番号	位置(cm)			層位	石質	大きさ	法量(cm)			重量(g)	赤化	黒色付着物	破損面赤化タイプ	番号	位置(cm)			層位	石質	大きさ	法量(cm)			重量(g)	赤化	黒色付着物	破損面赤化タイプ
	グリット	N	E				長さ	幅	厚さ						グリット	N	E				長さ	幅	厚さ				
No. 93	D 6	100	915	IV	—	4.8	3.5	1.7	50	×	△		No.117	C 7	760	308	IV下	D	12.5	12.5	5.2	640	×	×	a		
No. 94	D 6	0	400	V上	A	13.4	11.2	7.1	1,120	×	△	—	No.118	D 7	935	642	V	B D	13.0	6.8	2.8	230	×	×			
No. 95	D 6	42	70	V上	A	13.0	11.5	9.0	1,470	×	△	—	No.119	E 7	701	950	V	A	25.4	13.1	12.5	4,980	×	△	—		
No. 96	D 6	62	242	V上	A	20.0	16.0	8.5	2,390	×	×	—	No.120	D 8	283	627	V	B A	22.9	15.3	12.8	4,360	×	×	—		
No. 97	D 6	37	668	V上	A	13.3	11.1	5.5	1,060	×	×	—	No.121	D 8	332	648	V	B	18.0	12.1	8.0	1,500	×	×			
No. 98	D 6	80	962	V上	B C	11.5	6.5	2.9	270	×	×	a	No.122	B 6	109	555	V	A A	14.7	12.5	11.2	1,380	×	△	—		
No. 99	D 6	536	960	V上	C	11.0	10.3	8.8	920	×	△		No.123	B 6	241	340	V	B	16.0	15.4	9.7	3,040	×	×			
No.100	D 6	524	752	V	A A	19.3	8.4	6.8	1,080	×	×	—	No.124	B 6	89	324	V	A A	7.6	6.5	4.7	270	×	×	—		
No.101	D 6	568	666	V	A	—	9.9	8.6	3.3	220	×	×	—	No.125	B 6	178	476	V	A A	6.4	4.6	3.6	80	○	△	—	
No.102	D 6	554	498	V	A	—	6.1	4.9	2.3	100	×	×	—	No.126	B 6	225	514	V	B	8.0	7.6	6.0	420	×	×		
No.103	D 6	694	366	V	B A	9.6	8.1	2.6	250	×	×	a	No.127	B 6	153	630	IV	A A	7.4	5.8	3.6	170	○	×	—		
No.104	D 6	778	191	V	B C	9.2	6.1	4.6	260	×	△		No.128	B 6	179	702	V	A B	10.0	9.5	4.3	460	○	△	a		
No.105	D 6	250	224	V	A B	7.7	5.4	2.5	140	×	×		No.129	B 6	88	871	IV下	B A	7.6	7.0	5.3	280	○	×	—		
No.106	D 6	200	120	V	A	9.9	5.2	2.6	180	×	×	—	No.130	B 6	62	850	IV下	A A	7.6	5.9	4.5	220	○	×	—		
No.107	E 6	114	946	V	A A	15.7	9.2	8.0	1,120	×	×	—	No.131	B 6	0	849	IV下	B A	10.0	6.2	3.0	250	○	△	—		
No.108	E 6	128	932	V									No.132	B 6	109	555	V	A D	5.3	4.1	1.5	40	○	×	c		
No.109	E 6	280	806	V	B A	3.5	8.9	6.5	940	×	×	—	No.133	B 6	329	945	IV	A D	4.3	3.5	0.6	10	○	×	c		
No.110	C 7	642	350	V	C	18.2	17.5	8.1	2,210	×	×	a	No.134	B 6	328	941	IV	A D	8.0	7.0	4.1	480	×	×	a		
No.111	C 7	739	361	V	A	9.6	9.5	4.3	520	×	×	—	No.135	B 6	888	402	V	A A	8.0	5.6	3.0	140	○	×	—		
No.112	C 7	904	226	V	B A	15.0	11.8	7.5	1,480	×	×	—	No.136	B 6	845	695	V	A B	11.1	4.8	3.0	200	○	△	c		
No.113	C 7	828	162	V	D	7.4	5.3	3.5	100	×	×	a	No.137	B 6	840	963	V	B A	8.0	7.4	5.4	260	○	△	—		
No.114	C 7	630	244	V	A	8.9	4.5	3.0	140	×	×	—	No.138	B 6	780	966	IV下	A A	23.5	11.0	10.2	3,990	×	×	—		
No.115	C 7	800	196	V	D	13.3	11.6	4.6	660	×	×	a	No.139	B 6	752	900	IV下	A B	34.3	14.7	9.5	6,060	×	×	a		
No.116	C 7	841	8	V	A A	13.0	7.0	4.8	570	×	×	—															

【凡 例】

位置：(例) グリット N E
D 5 740 876 D 5グリットの北から740cm東から876cmの位置。

石質： A 流紋岩 大きさ：A 完形礫
B 角礫凝灰岩 B 破損礫 80%以上の大きさのもの
C 花崗岩 C 50%程度の大きさのもの
D その他 D 50%以下の大きさのもの

赤化：○ 全面に赤化がみられるもの
(礫表面) △ 部分的に赤化がみられるもの
× 赤化のみられないもの

黒色付着物：○ 全面に付着のみられるもの
△ 部分的に付着のみられるもの
× 付着のみられないもの

破損面赤化タイプ：a 赤化していない破損面しかないもの
b 赤化した破損面と赤化していない破損面の両方あるもの
c 赤化した破損面しかないもの

第二節 縄 文 時 代

縄文時代の遺物は耕作による攪乱層（表土）から出土する。したがって原位置をとどめているものはない。遺構はⅢ層上面で土壌7基を検出した（第40図）。いずれも上部は削平されているが、若干の遺物を伴出し、それらから縄文時代早期後半より前期前半のものであることが推察される。

土 壌

土壌には多種多様のものであり、これらの機能が同じでないことを示している。土壌3については関東地方の縄文時代早期に認められる「落し穴」に類似している。土壌2は貯蔵穴とも考えられるが確証に乏しい。その他の土壌については性格を明らかにしえないが、土壌1は焼け石や炭化物が多いことから、火を使用する施設と無関係のものではないだろう。

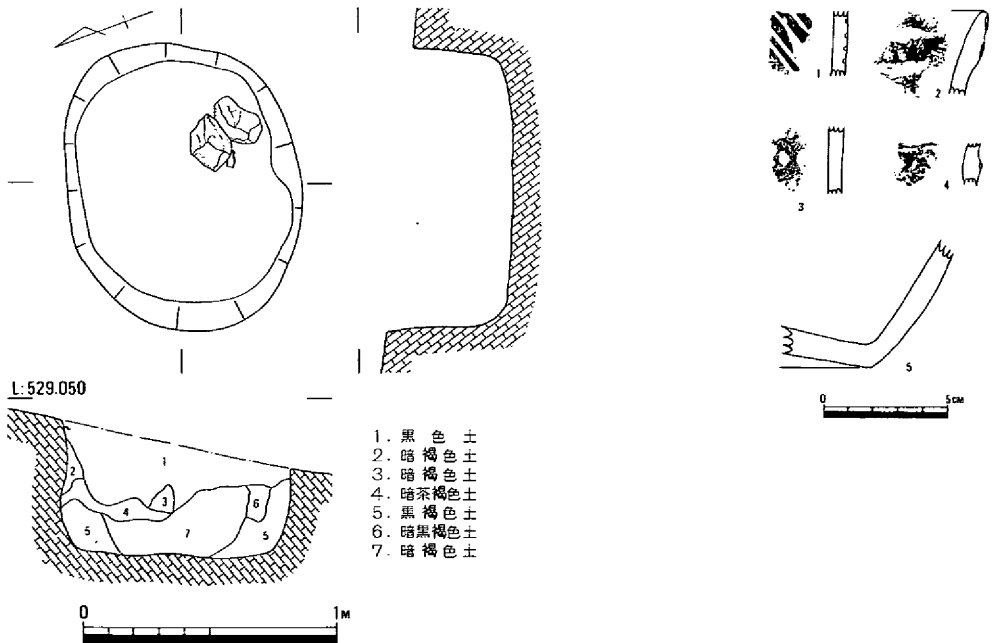
土壌1（第39図） 土壌内には焼け石が認められ、埋土中に炭化物を多く含んでいた。

土器は沈線の施されるもの（1）、刻目の貼付凸帯があるもの（2、4）、刺突文のつくもの（3）がある。5は底部で、上げ底を呈する。器壁は内外面とも丁寧に磨かれている。

土壌2（第41図） 不定形な平面プランを呈するが、西側は内部が広がり袋状をなしている。

遺物は埋土中より粗大楕円押型文土器片と、黒曜石製の石鏃が一点出土した。

土壌3（第42図） 深く掘り下げた底部中央には柱穴状のピットが認められる。遺物は無い。



第39図 土壌1と出土遺物

土壌4 (第43図) 径約90cmの円形を呈する。埋土中から遺物が出土した。

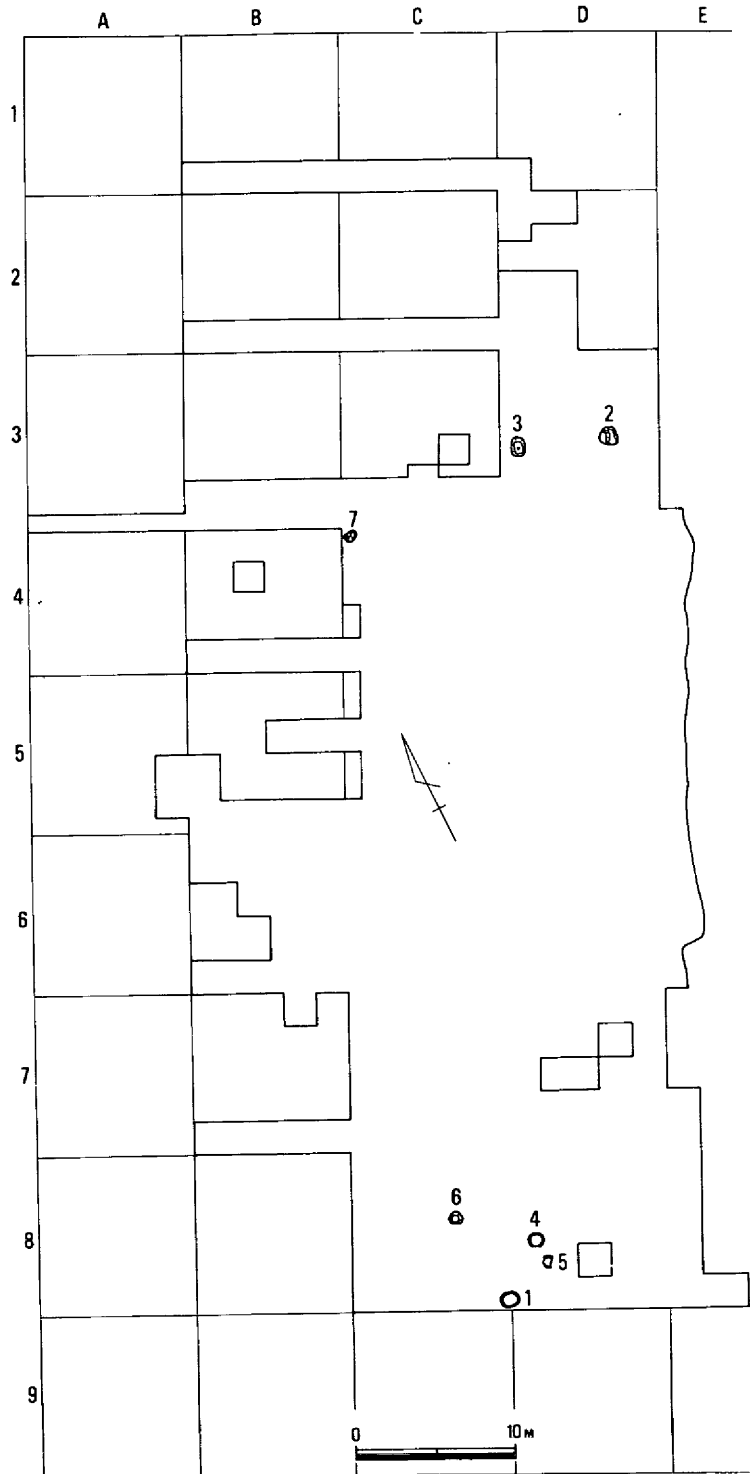
遺物はいずれも押型文土器であった。1、2は口縁部にあたり、外面に粗大楕円文を施し、内面には斜行する凹線が認められる。3も口縁部に近い破片で、内外面とも山形文が施されている。

土壌5 (第44図) 底部が僅かに残存していた。

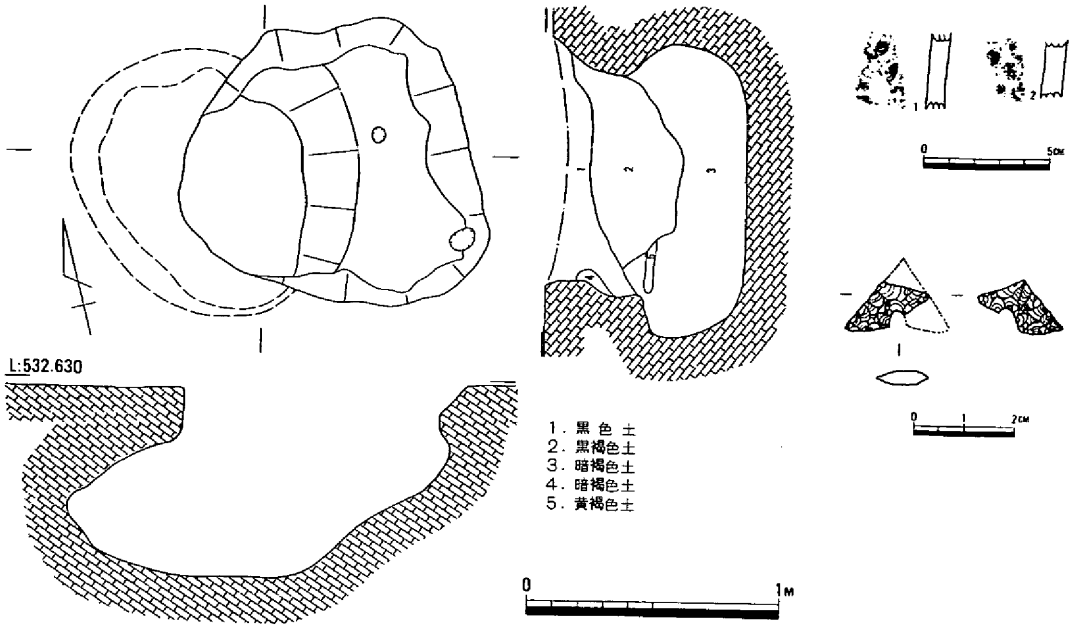
遺物は細片まで含めて約30点の土器が出土しているが、図示できたのは3点である。1、2は口縁部に近い破片で、貼付の凸帯に刻目が施される。外面はナデられているが、内面は条痕による調整が認められる。3は連続刺突文が施されている。内面は丁寧にナデられている。

土壌6 (第45図) 径約80cmでほぼ円形を呈する。遺物は無かった。

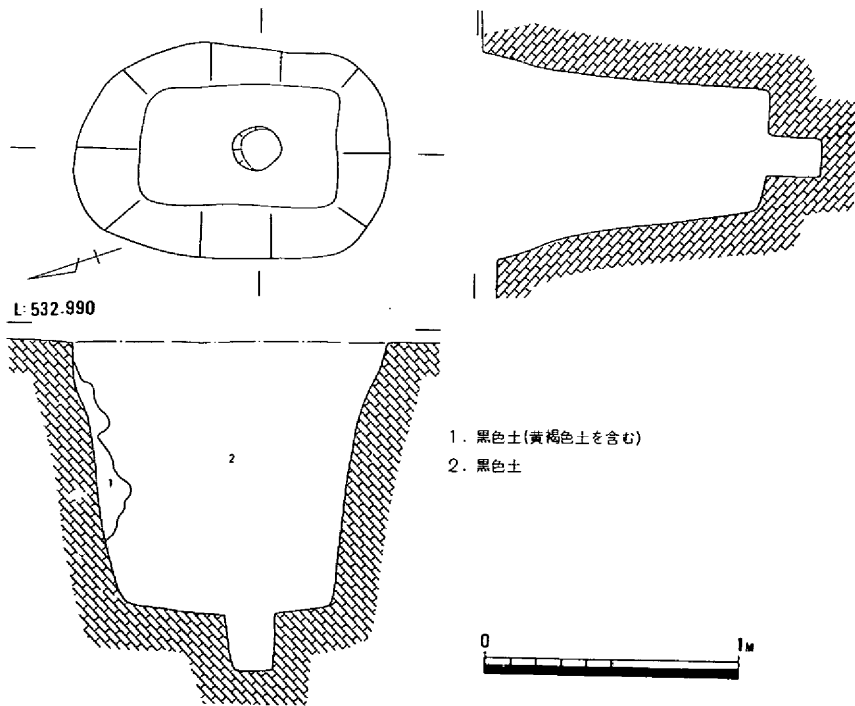
土壌7 (第46図) 平面プランは瓢箪状を呈している。遺物は無かった。



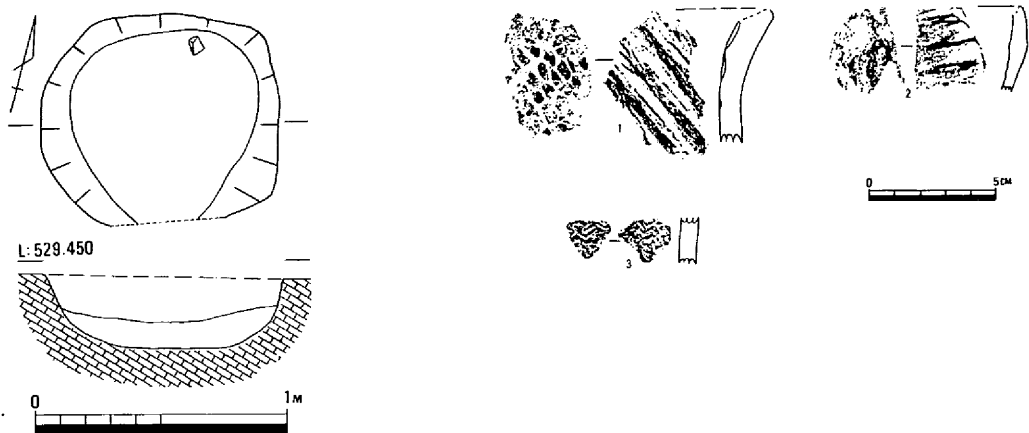
第40図 縄文時代の遺構全体図



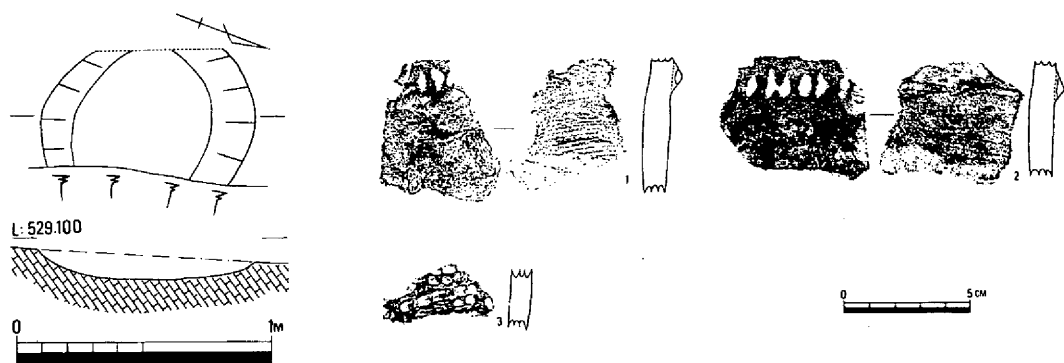
第41図 土壌2と出土遺物



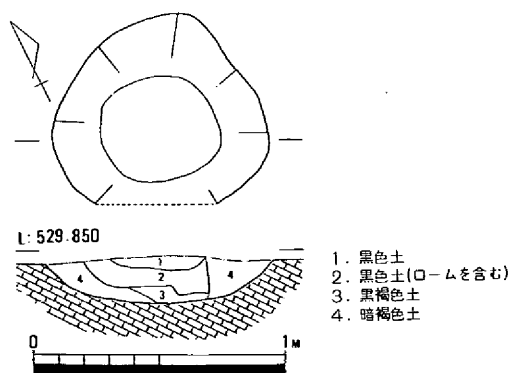
第42図 土壌3



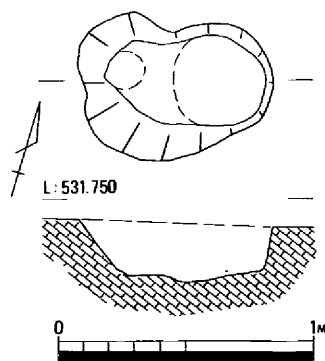
第43図 土壌 4 と出土遺物



第44図 土壌 5 と出土遺物



第45図 土壌 6



第46図 土壌 7

第Ⅳ章 早風A地点出土の石器群

早風A地点出土の石器・剝片類はⅢ層からⅤ層に含まれていた。しかし一ユニット内の遺物が各層に均等に含まれるというわけではなく、中心となる層が認められる。ユニットAはⅢ層とⅣ層を中心に、ユニットB～GではⅤ層を中心に含まれる。さらにこれらのユニット間では層位的な差だけではなく、石材も異なっており、上層の一群には流紋岩が認められず水晶・黒曜石を主体とし、下層の一群は流紋岩を主体とし水晶を全く含まず黒曜石も僅かに認められるにすぎない。

このような差は当然時間差を示すものと考えられ、Ⅴ層を中心に含まれる一群をⅠ期、Ⅲ・Ⅳ層を中心に含まれる一群をⅡ期とし、それぞれの石器群の特徴と編年について述べてみたい。なお、単独で細石核が出土しているが、一応Ⅲ期としてⅡ期より後出のものと理解しておく。

Ⅰ期の石器群はⅤ層を中心に含まれ、石材は流紋岩、砂岩、ハリ質安山岩、石英、緑色片岩を用いており、ユニットB～Gの石器が該当する。この石器群には、ナイフ形石器、楔形石器、削器、搔器、彫器、石斧、投弾、ハンマーが認められる。

ナイフ形石器は、大部分が幅広の縦長剝片を用い、打面を残置するものである。これらのナイフ形石器の素材は縦長剝片を使用しているが、石核を見ると縦長剝片を剝離するものではなく、不定形の剝片を作り出すものである。その中で整った縦長のものがナイフ形石器の素材となっている。なお32については、Ⅰ期とするかⅡ期とするか判断しがたいものである。

このような石器群について近接地域では比較する資料がなく、編年の位置については断定しがたい。ただ34は瀬戸内の翼状剝片に類似しており、また南関東ではⅣ層の下部に横割ぎの盛行する時期があり（註1）、火山灰の研究などを考え合せると、国府期以後の所産と推定される。

Ⅱ期はⅢ・Ⅳ層を中心に含まれ、石材は水晶と黒曜石を用いており、ユニットAの石器が該当する。この石器群にはナイフ形石器、楔形石器、削器、錐が認められる。

Ⅱ期のナイフ形石器で特徴的なものは小型のナイフ形石器としたものである（17～20）。これに類似したものは富山県立野ヶ原遺跡群（註2）の中に認められる。水晶製のナイフ形石器（3、6）は石材が異なるが九州の日ノ岳Ⅱ層（註3）のものに類似している。一方石核をみると、交互剝離状を呈するものが特徴的で、このような石核は瀬戸内海の櫃石島、井島などで認められ宮田山期以後の所産と考えられている。これらのことからⅡ期はナイフ形石器の終末に位置し、瀬戸内との関係でいえば、ほぼ井島Ⅰの時期に相当するのではないだろうか。

註

註1 小林達雄、小田静夫他「野川先土器時代遺跡の研究」『第四紀研究』第10巻第4号 1971

註2 橋本 正『立野ヶ原遺跡群』1973

註3 下川達彌「西北九州ナイフ形石器文化の概要」『長崎県立美術館研究紀要』第3号 1976

第47図 早風A地点出土石器編年図

時期	器種	ナイフ形石器	楔形石器	石核・剥片	その他
	石材				
II期	黒曜石			1	2
	水晶	3, 4, 5, 6, 7, 8	9	10	11
	黒曜石	12, 13, 14, 15, 16, 17, 18, 19, 20	21, 22, 23	24, 25, 26	27, 28, 29
	その他	0 5cm			30
	安山岩 (サヌカイトを含む)	31, 32, 33		34	35
I期	ハリ質安山岩	36, 37	38, 39	49	
	砂岩	40, 41, 42, 43			
	流紋岩	44, 45, 46		47	48

第 V 章 結 語

中国地方での先土器時代の研究は、香川県井島遺跡の発掘以来、もっぱら瀬戸内沿岸部を中心に進められた。1965年頃には一応の編年が完成され（註1）、サヌカイトを用いた横剝ぎの剝片剝離が支配的な地域として理解された。その後櫃石島や鷺羽山（註2）の表採資料が公表されたものの、やはり良好な遺跡に恵まれないことが、他地域に比較してやや停滞ぎみとなっている。

一方中国山地や日本海側では最近まで全く先土器時代の調査は行なわれておらず、遺跡すらも確認されてはいない状態であった。しかしそのような中で帝釈峽遺跡群の調査が成果をあげ、また中国縦貫道の発掘調査によって断片的に先土器時代の遺物が知られるようになり、やっと山間部における先土器時代研究の糸口がつかめだしてきた。

このような状況の中で早風A地点の調査が行なわれ、石器とともに、礫群、炭化物が層位的かつ平面的にとらえられ、山間部での先土器時代の様相を知る貴重な資料となった。しかしこの膨大な資料を短期間で整理し、すべて公表することは困難であり、本報告書は基本的な資料の報告にとどまり、資料編的性格のものとなった。これらの資料からさまざまな問題が指摘できるが、他の機会に責任を果たすこととして、ここではユニットについての若干のまとめを行い結語としたい。

早風A地点ではⅢ層からⅤ層にかけて石器・剝片類とともに、礫、炭化物などが含まれていた。一般的にこれらの遺物は一定のまとまりをもち、その集中部はユニット、礫群、炭化物集中部と表現され、その有機的な関連から遺跡の性格などが追求されている。早風A地点においてはユニットが7箇所認められ、その個々のユニットは規模、石器の在り方、石材、礫群・炭化物との関係等がそれぞれ異なっている。

ユニットAは水晶・黒曜石を主体とし、Ⅲ・Ⅳ層を中心に含まれるものである。ユニットの北端には礫群があり、炭化物が伴う。ユニット内は石材別にみると水晶と黒曜石の分布が異なっており、分離できる可能性もある。石器も多く、石核から剝片・碎片まで認められるが、碎片が集中する場所があり、ここで二次加工を施したことが考えられる。

ユニットBは石核が全く存在せず、剝片も少なくほとんど碎片からなっており、剝片を二次加工した場所と想定される。石材は碎片で判別できないものも多いが、安山岩とハリ質安山岩及び黒曜石である。ユニットBも礫群と炭化物が伴っている。これらの遺物はⅤ層に多く含まれることから、ユニットAより古い時期と考えられる。

ユニットCはユニットBの南に接しており、東西に細長いものである。石材はハリ質安山岩を主体とし、石器にはナイフ形石器、楔形石器などが認められるが、石核はなく、碎片が多い。このユニットも礫群と炭化物を伴う。これらの遺物はⅤ層を中心にⅣ層にも若干含まれる。

ユニットDは西側斜面にあり、南北に細長くいくつかのグループを形成しながらまとまるものである。石材は流紋岩を主体にしている。石器は多く、石核から碎片まで認められ、接合するものが多い

ことから石器製作のすべての工程が看手される。このユニットには礫群Ⅲ箇所と炭化物が認められるが、礫群ⅣとⅤは接合があり、同一のものであったと考えられる。これらの遺物はⅤ層に含まれる。

ユニットEは斜面に位置しているためか、遺物が斜面にそって流れる傾向がある。石材は流紋岩を主体とし、石器はハンマーと石斧があるだけで他は石核と剝片・砕片である。礫群は認められなかった。これらの遺物はⅤ層に含まれる。

ユニットFは石英と緑色片岩を主体としている。石器は刃部の折れた石斧が集中して出土し、周辺には未製品や原石が多数あった。礫群は認められなかった。これらの遺物はⅤ層に含まれる。

ユニットGは南斜面にある。石材はすべて石英で、石器は1点もなく、礫群も存在しなかった。遺物はほとんどⅤ層に含まれる。

さてこれらのユニットはいったい何を表わしているのであろうか。近年の大規模な調査によって遺跡全体を平面的に調査する例が増え、先土器時代も面的広がりでの研究が行なわれはじめ、ユニットについての論考も数を増してきた。これらの論考は住居址との関係で論じられる場合が多く、大別するとユニットを住居址として評価する説と、ユニット以外に住居址を推定する説とがあり、さらにこれらのことから集団関係にまで発展させ論及したものが認められる(註3)。

日本では先土器時代の住居址の発見例は少なく、それ以外の遺構についても竪穴状遺構あるいは土壙などが若干発見されているにすぎない。しかし上場遺跡(註4)では竪穴式住居址が発掘されており、住居内には遺物が集中して認められた。この住居址内の遺物は床面になく、上部にあることから住居址廃絶後に一括廃棄されたとも考えられる。一般的に縄文時代以後の住居址においても遺物がある場合、焼失した住居址でないかぎり、廃絶後に住居址へ遺物が廃棄された状態が認められ、これと上場遺跡の住居址は同じような状態であると考えられる。

早風A地点のユニットを見た場合、強いまとまりを示しており、むしろ住居址内へ一括廃棄されたものと考えられる。もし仮に住居址外に廃棄されているものだとすれば、丘陵上の生活の場合は石器・剝片類が散乱することになる。さらにユニット内には礫群を伴うものが多く、そのレベルが安定していることから、廃棄されたと考えるよりはそこに築かれていた屋内炉と推察される。またFユニットからは一括廃棄されたような状態で石斧が出土しており、土掘り具、あるいは木を切る道具であったと考えれば、竪穴住居址を推定してよいのではないかと考えられる。そうすると早風A地点ではすでに破壊された場所もあるが、Ⅰ期には6棟以上、Ⅱ期には1棟以上あったと考えることもできる。

註

註1 鎌木義晶・高橋 護「瀬戸内海地方の先土器時代」『日本の考古学』Ⅰ 1965

註2 『倉敷考古館研究集報』第4号 1968、『倉敷考古館研究集報』第6号 1969

註3 近藤義郎「先土器時代の集団構成」『考古学研究』88号 1976

春成秀爾「先土器・縄文時代の面期について(1)」『考古学研究』88号 1976

小野 昭「後期旧石器時代の集団関係」『考古学研究』89号 1979

註4 池水寛治「鹿児島県上場遺跡発見の住居址」『鹿児島考古』9号 1974

野原高原の地形と地質

1 野原高原の地形

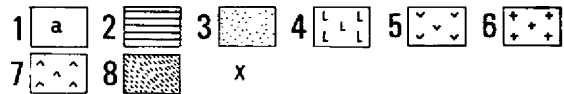
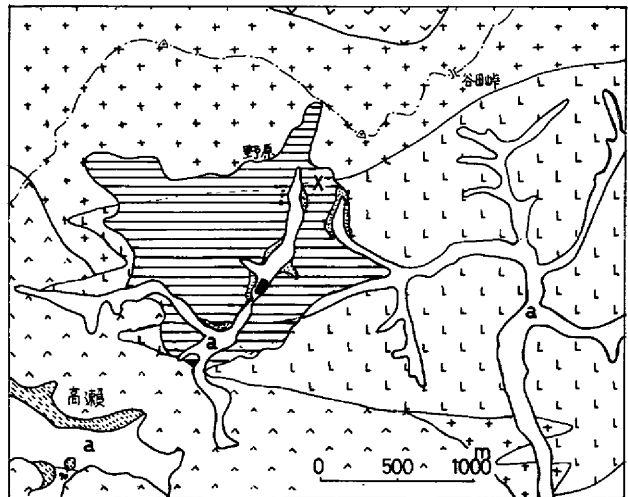
岡山県北西部の地形は、大きく脊梁部の標高 $900m \sim 1,200m$ の間に発達する道後山面と、 $500m \sim 600m$ の間に発達する吉備高原面に分けられる。道後山面は高位面であるが、吉備高原面は中位面で、山陰側で石見高原面と呼んでいる地形面に相当する。神郷町では中位面は脊梁部に樹枝状に入りこんでいて高原状の地形をつくっている。野原高原は吉備高原と石見高原が相接する場所に発達し、石見高原の最南端とも言える位置にある。西川、高瀬川は浸食面の形成後、隆起さらに下刻をすすめた過程で深い河谷をつくったが、遷急点のある和忠、高瀬より上流部では下刻がすすまず、中位面形成時に形成された浅い谷底平野が拡がっている。野原遺跡早風A地点は、野原高原の浅い谷底平野から比高 $5m \sim 10m$ 、標高 $535m$ で南にのびる緩斜丘陵上に位置する。ここは日野川をへだてて鳥取県の大倉山 ($1,112m$) をほぼ真北にのぞみ、日野川沿いの上石見へ通じる峠から吹きぬける北～北西風が卓越する場所である。

野原高原の起伏量は $100m$ 以下、傾斜度は $5 \sim 12^\circ$ 、谷密度 $10 \sim 15$ 本、地表には黒ボク土壌 (Bld型) が厚く被覆している。

野原高原の形成時期については新生代中新世以後と考えられている。

2 野原高原の地質

基盤の地質：野原高原付近に発達する地質のうち最古のものは古生代の苦鉄質～中性火山岩起源の三郡変成岩である。千枚岩質の岩石で一般走向は西北西～東南東で高瀬より西方に広く分布している。ついで中生代の火山岩類が見られるが、主要なものは三国山流紋岩類と千屋火山岩類である。三国山流紋岩は野原高原



野原周辺の地質図

- 1. 沖積層 2. 野原層 (ローム) 3. 野原層 (礫層)
- 4. 花崗班岩 5. 石英閃緑岩、閃緑岩
- 6. 千屋火山岩類 (石英安山岩および流紋岩) 7. 三国山流紋岩類 (凝灰岩および角礫凝灰岩)
- 8. 千枚岩 (火山岩起源の淡緑色千枚岩) × 野原早風A地点

の南をほぼ東西方向に帯状分布している。おもに流紋岩凝灰岩、角礫凝灰岩からなり、少量の石英安山岩を含んでいる。千屋火山岩類は、千屋を中心に分布するが野原高原では県境付近を東西に分布する。石英安山岩と流紋岩熔岩およびそれらの凝灰岩、凝灰角礫岩、それに少量の安山岩を含んでいる。中生代火山岩類は古生層をおおように発達するが、これらをぬいて白亜紀中期の花崗閃緑岩と花崗斑岩の岩体が分布する。花崗斑岩は野原高原の基盤岩としてもっとも広く分布する岩石で、淡紅色をおびた細粒斑状花崗岩が主体をなし、風化浸食が進行しやすく、凹地を形成しやすいことが野原高原形成に関係しているものと考えられよう。

新生代の備北層群（新第三系）が神郷町の笹尾、小谷に分布することが知られているが、高瀬付近には時代末詳の礫岩が断片的に分布する。この礫岩の固結度、礫の円磨度、礫種および節理の入り方などの検討からは第四系とは考えられず、備北層群に含めるのが妥当であり、山陰側の新第三系との関連、古地理を考えるうえで重要と思われるが、今後の研究にまつことにする。

表層の地質：野原高原のクロボクの下には厚さ2m近いローム層と、更にその下に厚さ5～10mの礫層が発達する。これらを一括して野原層と命名することにする。野原層は上部に野原ローム層、下位が野原礫層からなる洪積層（更新統）で、風成の野原ローム層が旧石器包含層である。野原礫層は亜円礫ないしは円礫からなる陸水成層である。野原層の分布高度は530～600mで地形的にみて北に緩斜するように見えるが、

露頭が少なく、周辺山地の山麓緩斜面に発達するベディメントとの関係はわからないが、早風A地点の発掘地点付近を本層の模式地とする。

野原礫層は層厚5～10mでほぼ水平に発達する。礫種は中生代火山岩類が圧倒的に多く、花崗岩類、三郡変成岩がこれにつぐ。礫はかなり風化がすすんでおり、くさり礫、化している。基質は砂からなるがルーズで、未固結灰白色の粘土をはさんでいる。また、Fe、

野原周辺地質総括表

新 生 代	第 四 紀	現 世	沖積層	早風遺跡 大山火山・三瓶火山 準平原化 古瀬戸内海海進 深成岩の侵入 陥没・火山活動 広域変成作用 本州地向斜
		更 新 世	野原層 { ローム層 礫層	
	第 三 紀	中 新 世	時代未詳礫岩	
中 生 代	白 亜 紀		花崗斑岩 花崗閃緑岩 千屋火山岩類 三国山流紋岩類	
			三郡変成岩	
古 生 代				

Mnの集積層もみられる。化石の証拠はないが、分布、風化の程度、産状などからみて更新世前～中期のものとする。早風A地点の発掘現場の層序でⅥ層a、b、c、dとⅦ層が本層に相当する。

野原ローム層は野原礫層を不整合におおって分布する。風成層で火山灰に由来するロームが主体であるが、局部的には水成を思わせるような、板状ラミナの発達したところや、小礫をはさむこともある。層厚は1.5m～2mで表層はクロボクでおおわれている。本層は3層に細分され、早風A地点の柱状断面、Ⅲ、ⅣおよびⅤ層がそれである。これらはごく軽微な不整合関係で成層しているが、その関係は水平的に広く追跡できるものであるかどうかは不明である。ここでは主に早風A地点での観察を中心に説明する。

Ⅴ層は礫の混入する粘質ロームで厚さ50cm、やや暗い感じがする。Ⅵ層との不整合は明らかであるが、Ⅳ層との関係はあまりはっきりしない。

Ⅳ層は湿り気が多く、粗～軟の堅密度の塊状の構造をもつ30cm強の黄褐色粘質ロームである。Ⅴ層およびⅢ層との関係は軽微な不整合である。

Ⅲ層は黄褐色のロームで、白色の長石粒を多く含むほか、雲母の結晶を含んでいるのが肉眼でわかる。本層の上部にクラックが発達しているが、有機物の混入が多く、地層はやや乱れている。25cm±のロームでⅡ層との関係は明瞭な不整合である。いわゆる“ソフトローム”に似て軟らかく、弾力性があり、団粒状の構造である。旧石器以外に角礫など大型の自然物の混入はない。

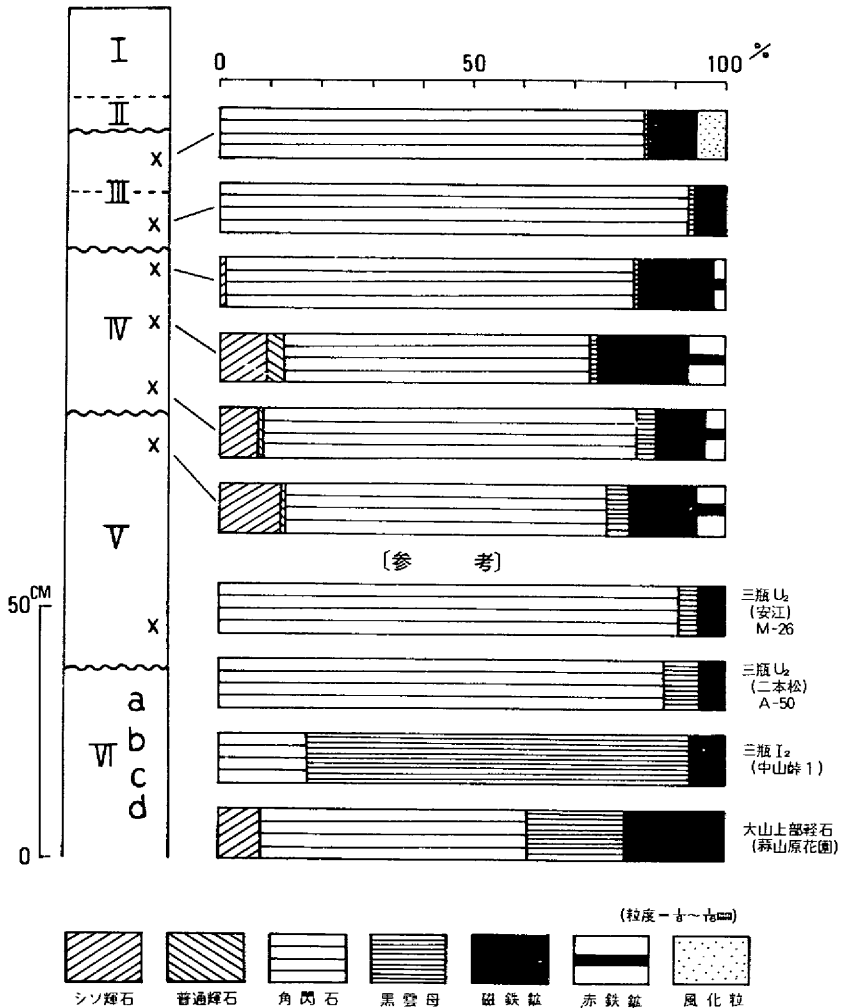
野原ローム層を構成する火山灰は重鉱物組成などからみて三瓶火山と大山火山から供給されたものと考えられ、その地質時代は出土する遺物、鉱物組成による対比などからみて第四紀洪積世後期のものと考えられる。

野原層をおおって広く分布するクロボクは腐植にとむ火山灰土壌であるが、諸性質から3層に分けられる。すなわち、表層の10cmがA₀層、その下の20cmがA₁層、更に下の40cmがA₂層である。A₀層は腐植にとみ黒褐色(7.5YR_{2/2})、A₁層は黒色(10YR_{1/1})で軟～粗の堅密度をもつ土壌、A₂層は黒色(7.5YR_{1/1})でやや湿ったローム質の土壌である。早風A地点の柱状断面ではⅠ、Ⅱ層の2層がクロボクでⅠ層は耕作土、Ⅱ層はやや自然状態のクロボクでそれぞれA₁、A₂に対応するものとする。クロボクは現世のものであることは出土遺物の面からも言えるが、中国山地各地のクロボク形成年代の研究からも言えるところである。

3 野原ローム層の重鉱物組成

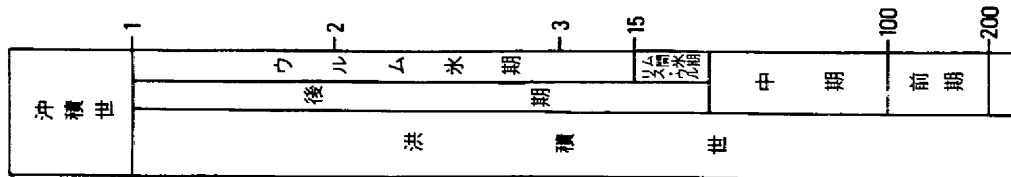
野原層に火山灰を供給したと考えられる第四紀火山にはまず三瓶火山と大山火山(烏ヶ山を含む)が考えられる。三瓶山は現地からほぼ真西に60kmのところを位置し洪積世後期の噴火であることが知られている。大山火山は野原から北東へ35kmの直線距離に位置し、活動は第四紀洪積世前期～後期にわたるものである。このほか、広域に分布する火山灰として南九州の始良火山灰(AT)と鬼界カルデラから噴出したアカホヤ火山灰の存在が考えられる。始良火山灰(AT)は大山付近で“キナコ”と呼称し、大山上部火山灰層に一括していたもので産状に特徴があり一見識別できるものである。“キナコ”は野原の近くでは、鳥取県日野郡黒板、印賀、岡山県蒜山原などに明瞭に認められるにもかかわらず

野原早風遺跡ではこれを欠いている。野原遺跡はこの点から始良火山灰降下以後（2万～2.2万年前）とすることができる。野原ローム層の火山灰の供給源を知るために重鉱物組成をしらべた。試料は早風A地点の標準断面から採集したものを所定の方法で処理し、 $\frac{1}{8} \sim \frac{1}{16}$ mmの粒度のものをとり出し、磁力分離機で重鉱物を分離し鏡下で同定、量比を求めてその結果を図示した（第2図）。その結果、Ⅲ層は新鮮な角閃石を主体とするものであることがわかった。Ⅲ層上部には風化粒（不明鉱物）が多く、地層の乱れを示しているがⅢ層下部は角閃石とごく少量の黒雲母（これは処理の過程でむしろ除外されるものであるが露頭ではよく認められる。）および磁鉄鉱からなることがわかった。

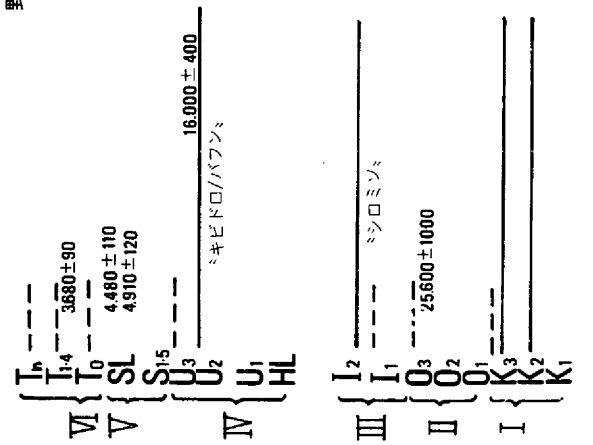


野原層（ローム層）中の重鉱物組成

(万年前) 三瓶火山

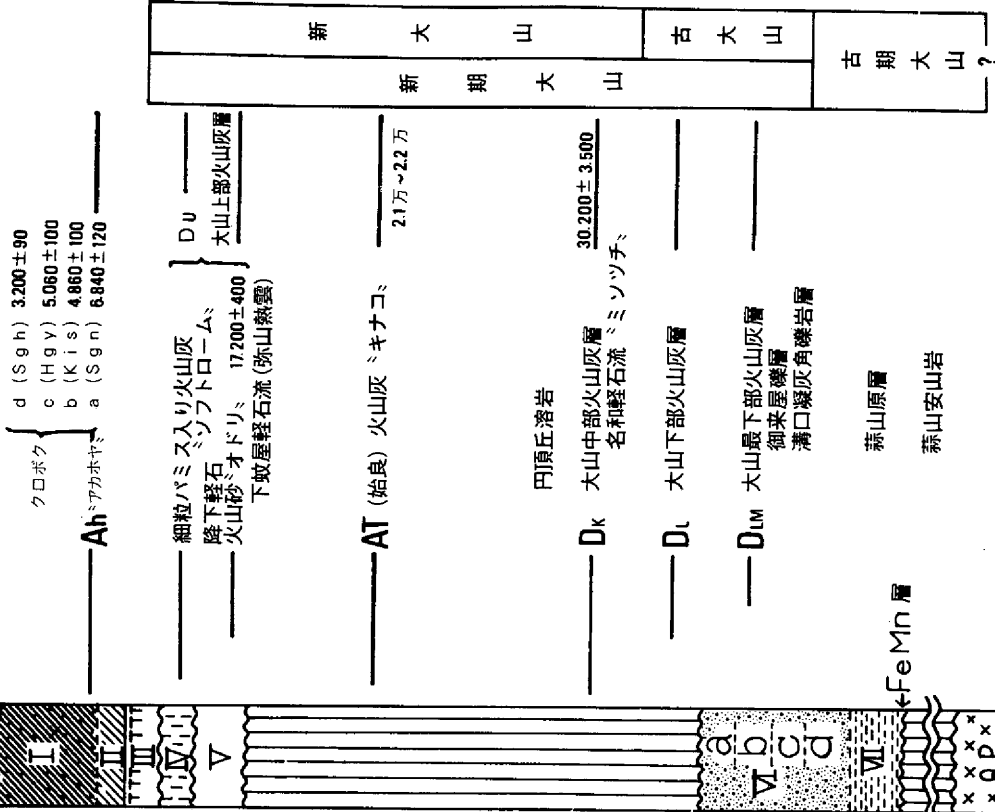


野原早風A地点



U₂: 浮布降下軽石
 I₂: 池田降下軽石
 K₃: 木次降下軽石
 K₁: 神戸川降下軽石

大山之周辺



クロボク
 d (Sgh) 3,200 ± 90
 c (Hgy) 5,060 ± 100
 b (Kis) 4,860 ± 100
 a (Sgn) 6,840 ± 120

Ah
 細粒バミ ス入り火山灰
 降下軽石 シニアトローム
 火山砂 オドリ、 17,200 ± 400
 下城屋軽石流 (弥山熱雲)

AT (始良) 火山灰 キナコ

円頂丘 溶岩

Dk 大山中部火山灰層
 名和軽石流 ミミソツチ

Du 大山下部火山灰層

D_{LM} 大山最下部火山灰層
 御来屋礫層
 溝口凝灰角礫岩層

赤山原層

赤山安山岩

← Fe Mn 層

新 大 山
 新 期 大 山
 古 大 山
 古 期 大 山 ?

Ⅳ層の試料は、シソ輝石を混入している点でⅢ層と区別できる。しかし、その量比は不安定でⅣ層が二次堆積したか、別の火山灰が混合した可能性もある。Ⅴ層の組成もⅣ層と基本的には変わらない。シソ輝石がどこから供給されたものであるかが問題であるが、角閃石と比較してややよごれていることなどから基盤岩の風化物からの混入も考えられる。いずれにしても三瓶山の火山灰中にはシソ輝石は痕跡的にしか見られないので、これらのシソ輝石の供給源は三瓶山とは考えがたい。

上述のこれらの資料をもとにして火山灰を対比すると、Ⅲ層は三瓶火山、新三瓶期の浮布降下軽石(U₂)—俗称キビドロ、もしくはバフン、—に対比するものをもっとも妥当なようである。Ⅳ層、Ⅴ層もシソ輝石が現地でも混入したとするなら、U₂の時期とすることも可能である。しかし、大山火山の上部火山灰中の軽石の重鉍物組成はシソ輝石も含有し、Ⅳ、Ⅴ層のそれとよく似ている。大山上部火山灰層の重鉍物組成の研究が充分でない現在この点は断定できないところである。Ⅳ層とⅤ層の不整合は早風地点では明らかであっても水平的には普遍的なものではなく、したがって、ごく軽微な非整合とすべきもので時間的には大きい時間差が認められないものであるかもしれない。野原ロームの堆積時期は前述の如く、始良(AT)火山灰降下の2.2万年以後でⅢ層をU₂とするなら10,000年前後、仮りにⅣ、Ⅴ層が大山火山からの供給としてもその時期には矛盾はなく、野原ローム層は1.6万年～1.7万年以降のものと考えてよい。なお、Ⅰ、Ⅱ層のクロボクは遺物の方から沖積世と考えられているが、その母材にアカホヤの混在する可能性がある。その根拠は、伯耆大山の笹ヶ平のクロボク(a(Sgn) 6840±120Y・B・P)がアカホヤと同定されているからである。アカホヤの陸上における分布からみて、野原高原は降下域に入るが、この点は時間的な余裕がなく解決できなかった。今後の研究にまつところである。

なお、重鉍物分析およびその考察について鳥取大学教育学部岡田昭明博士にお世話になった。記して感謝の意を表する。

参考文献

服部 仁(1978) 上石見地域の地質、地質調査所。

蒜山原団研グループ(1975) 岡山県蒜山原の第四系、地球科学29巻4～5号。

町田 洋、新井房夫(1976) 広域に分布する火山灰—始良火山灰の発見とその意義—、科学、46、P339—347。

町田 洋、新井房夫(1978) 南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ—アカホヤ火山灰、第四紀研究17、3、P143—164。

赤木祥彦(1970) 郷土のなりたち、神郷町史。

北備後台地研究グループ(1969) 農用地下水賦存調査大規模備後台地地区報告書、農林省中国四国農政局。

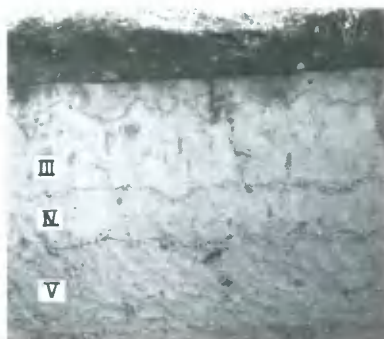
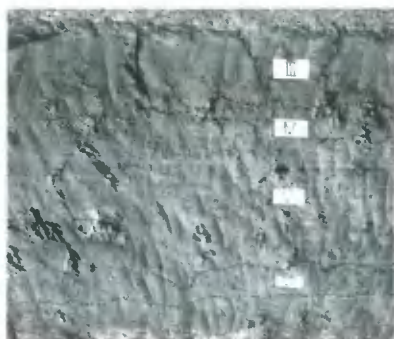
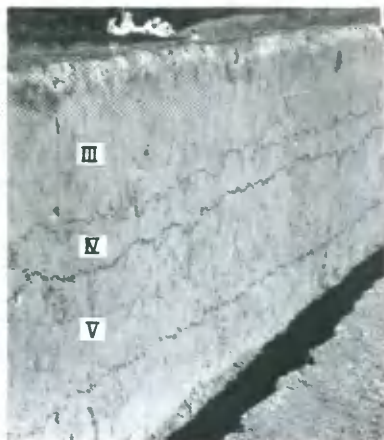
(鳥取大学教授 赤木三郎)



1. 遺跡遠景 (北より)



2. 遺跡遠景 (西より)



層 位



作業風景 (夏・秋・冬)



ユニットB・C



ユニットAのナイフ形石器



ユニットAの削器



ユニットAの水晶原石



ユニットEの石斧



ユニットFの石斧



礫群Ⅰ



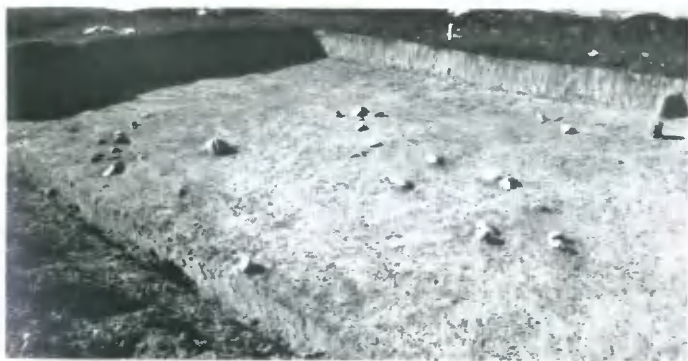
礫群Ⅱ



礫群Ⅲ



礫群Ⅳ



礫群Ⅴ(左)とⅥ(右)

礫群出土状態



土壇 1



土壇 2



土壇 4

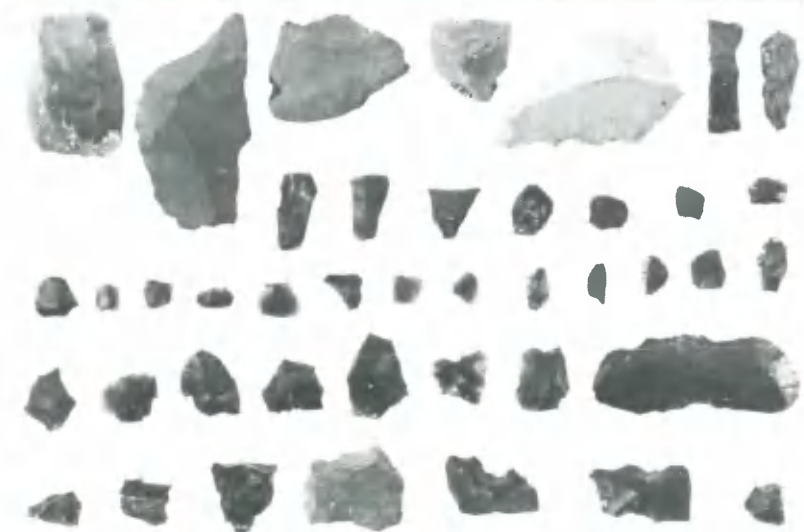


土壇 5

1. 縄文時代の土壇



2. 調査終了時の全景 (東北より)



1. ユニットAの石器



2. ユニットBの石器



1. ユニットCの石器



2. ユニットDの石器



1. ユニットE・Fの石斧



2. 単独出土の石器



3. 投弾・ハンマーストーン





接合資料

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(32)

野原遺跡群
早風A地点

昭和54年3月27日 印刷

昭和54年3月31日 発行

編集発行 岡山県教育委員会

印刷 岡山県出納局用度課